



● 「初めて」 201号室

・東

・緑

● 「お姉様と私」 202号室

・増山将多

・稲葉沙樹

・ヒメノ

● 「人質」 204号室

・ユウ

・アサミ

・田代章太郎

・篠崎菜々子

● 「池田屋なの」 203号室

・土方歳三

・沖田総司

● 「やつと会える」 205号室

・宏治

・愛（ピザ屋として他のシーンも）

● 「夫婦×2」 505号室

・響生

・繭

・リュウヘイ

・ヤヨイ

■ 『暗転セクロス』

現代、初秋。

全話、安いモーターの一室での話である。内装は地味な洋風。ベッドはセミダブル。一人がけの肘掛け椅子、サイドテーブル、電気スタンド。

電話、冷蔵庫。壁には安い絵画が掛かっている。壁紙に沁み。絨毯にも沁み。窓の外は廊下。ネオンの明かりや、歩く人が見える。部屋にはシャワー室、クローゼットもある。

■ 〈初めて〉 201号室

深夜。外は大雨。東（あずま）と緑（みどり）、入ってくる。少し肩や髪が濡れている。

二人とも、やたらと大人ぶっている。

東 「おお……。なんか、汚えな（部屋が）」

緑 「そう、ですね」

東 「ごめんね、もっとちゃんとしたとこ選ばばよかったな」

緑 「うん、まあでもこの雨だし。選択の余地はなかったじゃない」

東 「ありがとう、そう言ってくれて」

と冷蔵庫を開ける。

東 「おいおい、空っぽだ。あり得ねえ。ルームサービスは…

…」

緑 「なんか買ってきましようか」

東 「また雨の中戻るの？」

緑 「そうよね」

東 「君、濡れてるね」

緑 「え！」

東 「上着、脱ぎなよ」

緑 「あ、うん」

と上着を脱ぐ。パトカーが何台か通ったり。

東 「わお。セクシー」

緑 「ありがとう」

と上着を預ける。東、自分の上着も脱いでクロー

ゼットに掛ける。

緑 「なんか慣れてる(笑)」

東 「そんなことないよ。緑さんもよくやるんでしょ」

緑 「何が」

東 「出会い系」

緑 「ああ」

東 「なんで。モテそうなのに」

緑 「あなただって、こういうところよく来るんでしょ」

東 「……」

緑 「じゃあ、だいたいおうちだ。アプリで女の子とつかえひ

つかえして。悪い人だなー」

とベッドに艶めかしく腰掛けたり。

東 「緑さんは、ストレス発散？ 出会ったと男と一晩だけ過

ごして、さよなら、みたいな？」

緑 「なにそれ(笑)。そっちこそ、あんまり遊んでばっかい

るとバレちゃうよ、学生さんに」

東 「うちの学生はあのアプリにはいないよ。そっちだって社

員さんに見つかるかもしれないよ、プロフィール」

緑 「見つからないよ、うちは小さな会社だし、女子しかいな

いから、私のプロフは見えない」

東 「なるほどね。でも社長だもんなあ。すごいよな」

緑 「……ねえ。私ってビッチに見える？」

東 「そんなことあないよ」

緑 「じゃなんで」

東 「まあ、一目惚れ？ かな」

緑 「え……。またまた。上手いこと言って」

東 「ははは。俺は？」

緑 「タイプ。うふふ」

気まずい間。

二人「じゃあ」

緑 「なに」

東 「どうぞ」

緑 「お先どうぞ」

東 「シャワー、浴びようか」

緑 「一緒に！？」

東 「お先どうぞ」

緑 「……うん。じゃあ、先寝てて」

東 「おう」

緑 「ほんとに寝ないですよ？」

緑、シャワールームへ。

東、緑が消えた途端、携帯を取り出す。

東 「……出る。出ろよ早く！ 出るポケこら……早く。う……

……。く……。か……。だ……。あもしもし。お前出る

よ。風呂？ 入ってんじゃねえよ。今日は全面サポー

トしてくれるって言ったじゃんよ。……いやすまん、

メールでもよかったんだけど、なんて言うか、緊急事

態でさ。電話の方が早いって思っ。そう、そのまま

か。俺入った。入った。入った。入ったんだよ。(怒鳴

り) チンコじゃねえよホテルだよ！ シー！

と大声を出してしまった。

東 「どうすればいい。どうすればいい。サッカー？ ワールドカップ予選？ いや頼むよ！ テレビなんか後でいいじゃん。お前が見ようが見よまいが試合の結果は変わらない。それより俺！ 俺の試合をなんとかしてくれよ。……さっきまであんなに丁寧にアドバイスをくれたじゃん。最後まで責任持ってやってくれよ。……もしも？ 今テレビ見てただろ。いや頼むよ。俺どうしていいかわかんねえよ。お願い。頼む。いやそんなこと言わないで……。 (怒鳴り) 俺だってゴールしたいんだよ！ シー！」

と、またもや。

東 「俺が童貞だって知ってるだろ。俺もう三十なんだよ。魔法使いになっちゃうよ。頼む。一生のお願い。分かった。奢る。叙々苑！？ 二回！？ 分かった。叙々苑二回奢る。だから……。 (泣)。泣いてねえよ……。泣く理由がねえだろ」

と泣いている。

東 「コンドーム！？ ……場所？ どこ。どこにあんの！ ベッドの、上の、電気の付いたパネル？ ない！ ……え、なんか普通のホテル。なんていうの、アメリカとかにありそうなさ、モーター、みたいな？ 国道沿いの。あーあそこかじゃねーよ。おまえみたいな既婚者がいるから日本は少子化するんだ。……え？ 袋？ あった！ 袋に入ってたよ！ なんかRPGみてえだな (笑)。宝物探して、最後はボスキャラと戦う、みたいな (笑)。(自分に) 笑ってる場合じゃない。……枕の下。おけ。枕の下。封は？ 封。誰っていう意味じ

やない。ゴムの封。切るのか切らないのか。あ、そのまま。乾燥しちゃう。なるほど。……次は？ 服装は？ パンツ脱ぐの？ よくあるじゃん、シーツの中に、先にハダカで入って待ってる、みたいな。え、やんないの！？ 俺ホント何も知らねえな……」

と屈む。

東 「あれ？ なんでだろ。緑さんはなんで俺なんかとこんな場所に来てくれたんだろ。あ、いや。アプリで出会ってさ、ちよつとやり取りして、それで、会いましょみたいになつて。会った瞬間、俺、ガチで一目惚れしてさ。そこまでは言ったね。で、お前のアドバイス通りカウンターのある店行つた、その後言われたとおりバーにも行つた。で、そろそろ帰りましようか、つてなつた。大雨降つてきた。雨宿りしましょ、電車なくなつた。で、一世一代の勇気を出して、誘つて、ここ。……どうしよう、全然上手くいかなかったら。俺が下手くそで怒っちゃったりとか、嫌われたりとかしたら……。なんでこんなセックスって難しいんだ。なあ、どうすればいい。教えろ。知らないっていうなよ、この遊び人！ シー」

シャワーの終わる音が聞こえる。

東 「やばいやばいやばい！ あがつて来ちゃう。相手のタイプ？ えーっと何かエゴグッズとかの社長。女社長。見た目はセクシー系。え、そういう女は強引に行け？ 普段えらそうにしてる人は上からの攻撃に弱い。なるほど！ 強引つて、どういうこと！ ……まず肩を掴む。髪を撫でて、抱きしめて……、急に押し倒す？ 急に押し倒すんだな？ オツケそれで？ 上に乗る！

え、両腕を上挙げて押さえつける。それお前、ヤバくね！？ マジヤバくね！？ ……で、で？ アゴ持つて、アゴ持ち上げて…キス、来たああ！ それから？」

シャワーの上がる音。東、電話を切る。

緑 「お先です。どうぞ」

東 「え。あ。ああそうか、シャワーね。浴びた方がいいですよね。すぐとかじゃないですもんね」

緑 「すぐ？」

東 「急に元に戻ってキザに）あいや、何でもないよ。シャワー、浴びてくるよ。待ってるよ。」

東、シャワーへ消える。

緑、テレビを点ける。

テレビ 「…北区にあるコンビニエンスストア、合わせて五軒を次々と襲い、現金およそ三五〇万円を奪い、逃走しました。警察では現在、防犯カメラに映っている男女二人の行方を追っているとのことです」

チャンネル変える。

アダルトビデオが流れる（画面は見えず、音のみ）。

かなり激しいあえぎ声。

テレビ 「いぐー！ 死ぬー！ もうやめてええー！」

緑 「！……（圧倒される）」

テレビを消し、電話を掛ける。

緑 「もしもし葵？ 起きてた？ 私、今日死ぬかも……。今？ ホテル。ラブホ。ラブホつつうか、ラブホ？ みたいな感じのところ。ウケルでしょ。やばくない？ ……なにがって。セックスするのよ今から！ ……そう。私もね、セックスしたからって即結婚とは思わない

よ？ 世間はセックスイコール結婚ではないことくらいは、お姉ちゃんでも知ってる。でもね、結婚したいくらいいい感じの人なの！ 大学の教授だって。しかも国立大学。年収一千万ってプロフに書いてあった。顔？ 顔はまあ、いいよ？ 私の主観だから。どうしよ、社長とかって嘘ついちゃった……トキめいちゃったのよ。波長が合うっていうか、空気が合うっていうか。……いやでもさ、私初めてなのよホテルなんか来るの。……違うよ！ あんと一緒にしないでよ。お姉ちゃんまだ処女よ？ あんたはクソビッチかもしれないけど、お姉ちゃんにとってセックスってのは、進撃の巨人の壁並みに高いの！……仁志君？ 高2の時の？ いつの話よ。お姉ちゃんは彼氏ができたことありません。三〇歳です、何か文句ありますか。どうせ私は一生処女ですよ。穴に蜘蛛の巣張ってますよ。そのうちカンダタとか出てきちゃいますよ。……あなたに相談があるの。今はホテルです。まだ、こんな時間です」

と時計を見る。

緑

「彼と何もしないで、なおかつ好感度を保ったまま朝まで過ごすにはどうすればいいでしょうか。……だから無理だって！ セックスは無理！ だって怖いじゃん。白目剥いたりするんでしょう？ だらあーってヨダレ垂らしたりするんでしょう？ 泣き叫んでさ、エクソシストみたいに腰ぐわあって反ってさあ。髪振り乱しておしっこぴゃあって出してさあ。あんなのできない。……え。え？ 演技？ あれ、全部演技なの？ なにそれ。演技でおしっこできんの？ え、男が喜ぶ

から？ 女はみんな感じた振りをしてる？ (笑) そんなバカな。騙されないわよ。(マジ) そうなの？ ……あ、半分くらいは演技ってことね。どうやんの、演技。ねえ教えて！ お願い！ え……触られたら、身をよじる。触られたら身をよじるね。気持ちよさそうな顔？ どんな顔よ。分かんないわよ。眉毛寄せる。目を閉じる。胸少しそらす。口開ける。こんな感じ？ 写メ送っていい？ 判断して！ あ、でもさ、痛いんですよ最初って。痛いのに、気持ちよさそうな顔すんの？ そうか、処女だってバレちゃダメだ。男の人引くもんね……。声！ あの声どうやって出すのよ。エレベーターガール？ 『上へ参ります。上でございます。三階、婦人服、アクセサリー』こんな感じ？ これで、あんあん。『あん。あん』合ってる？ それから？ あやばい！出てきちゃう！ 行く？ とりあえず盛り上がったら行くなって言っとけばいいのね？ おっけ！ ありがとー！

東、出てくる。

東 「なんか、お湯の出が悪いね。急に冷たくなったりして」

緑 「ああそうそう。言えばよかったですね」

東 「(独り言) 肩を掴む、肩を掴む……」

東、緑の肩を掴む。

緑 「痛ったー！」

東 「髪を撫でる、髪を撫でる」

東、緑の髪をなで回す。

緑 「触られたら身をよじる。触られたら身をよじる」

と身をよじる。

東 「抱きしめる、抱きしめる」

緑 「眉毛寄せる。目を閉じる。胸少しそらす。口開ける」

東 「あちゃあ！」

東、押し倒す。

緑 「あん、あん！」

東、上に覆い被さる。

東 「腕を上上げる、腕を腕に上げる」

緑 「いく、いく！」

東 「アゴを持って、アゴを持って」

東、アゴを持って立つ。緑、アゴを持たれたまま立たされる。

緑 「上へ参ります。上でございます」

東、緑にディープキス。

緑 「!……ふごがつ！」

と苦しくなって、東を突き飛ばす。

東 「！」

と飛んでいき、どこかで体を打つ。

緑 「あ、ごめんなさい！ 大丈夫ですか」

東 「いって……」

チャイム。ピンポン。

二人「？」

東 「僕出ます。いって……」

ドア開ける。ピザ屋がいる。

ピザ屋 「こんばんはー、ローマ・ピザです」

東 「はい？」

ピザ屋 「じゃ、やりますね? 『♪大きい! 美味しい! すく

く早い! ローマ、ローマ、ローマピザ!』

と踊る。

東 「頼みました?」

緑 「いえ」

東 「頼んでないよ。ここじゃないんじゃない？ どこも部屋似てるし」

ピザ屋 「ええ？ (伝票が) 201って読めるんだけどなあ。分  
かりました。失礼します」

とドア閉める。

東 「ホントに踊るんですね、ローマピザの人って」

緑 「あの……、セックスしないとダメですか。私のこと嫌  
になりますか？」

東 「え……」

緑 「やっぱり！ 男の人は一度火が点くと収まりが付かない  
ってネイバーまとめにも書いてあったし。でも……私、  
できません」

東 「え」

緑 「できないっていうか。したことないんです。実は私……」

東 「聞こえてました。……聞こえちゃった、シャワー浴びて  
るとき。緑さんが誰かと喋ってるの」

緑 「そうだったんですか」

東 「実は俺も、そうなんです」

緑 「処女なんですか？」

東 「童貞です」

緑 「え。……だって」

東 「大学教授もウソです。ただの、塾の講師。全然稼ぎない。  
大学はわりといいところ出たんですけど、就職が上手く  
いかなくて。バイトの延長で。年収も全然。ごめんな  
さー」

と帰ろうとする。

緑 「最低ですよね」

東 「……」

緑 「最低です。さつき渡した名刺。社長って書いてあったヤツ。あれ、うちの社長の名刺」

東 「はい？」

緑 「私、そこで働く派遣社員。てかもうそこでは働いてない。全部ウソです。私、最低なんです。見栄が張りたかったっていうか、かっこつけたかったっていうか。もうこんな歳だし、なんかいい女に見られたくて……。さつき出していただいたホテル代、私出します」

東 「それはいいです。半分だけで」

緑 「!?!」

財布から金出す。

東 「僕マンキツでも行きますから、緑さんはここに泊まって下さ」

緑 「そんな。こんな雨なのに。私が出ますよ」

東 「いいですいいです。ホントに大丈夫ですから。……楽しかったです。ほんとに。あーあ、朝までやってる居酒屋でも行けばよかったなあ。……じゃ、おやすみなさい」

緑 「あの一！」

東 「？」

緑 「さっきのも、嘘ですか」

東 「いえ、ちゃんと童貞です」

緑 「そこじゃなくて。その、私に、その、さつき、一目惚れして」

東 「それは……本当です。でも言葉ではなんとでも言えちゃうんで、ちゃんと行動で示したかったんです。でも、僕にはそういうなんていうか、技量がないんです。ほ

ら、男ってリードしないとダメ、みたいな風潮あるじゃないですか。女性がそういうのを求めているっていうか、求めているという幻想を男が持つてるっていうか。収入とか、将来の安定とか、会話の面白さ、優しさ、セックスの巧さとか？ 求められるのはいつも男ばかりな気がして。あそれは僕が男だからそう感じるだけなんでしょうけども、なんていうかすごいプレッシャーで。つまり、その」

緑 「分かります ……女も同じですから」

東 「僕も一つだけ。どうして見栄を張ったんですか、僕なんか」

緑 「……もっと話したいなああって。もっと知りたいなああって。そう思ったんです。だからあんなウソついちゃって。セックス、しないとダメかな、とか、なんかそういうことすれば気に入ってもらえるかなとか、何かもうわけわかんなくなっちゃって、それでもう……。ごめんなさい」

と泣けて。

東 「……こういうとき、普通どうするんですかね。なんか、こう（手を抱きつく仕草）、とか、するんでしょうかね  
(笑)」

緑 「分かりません。処女だし。彼氏もいたことないんで」

東 「あ、僕もです。彼女いたことないです」

緑 「見えないです」

東 「あなたの方が見えないです」

緑 「でも……そういうの（抱きつく手つき）、ちょっと、いいですよね」

東 「はは……」

変な間。

緑 「……サツカーの結果とか、気になりますよね」

東 「へ？」

緑、テレビを指す。

東 「あ。ああ。そうですね。見たいですね。見てもいいですか」

とりモコンを。

緑 「どうぞどうぞ。ダメ！」

東 「え」

緑 「壊れてます、これ。お酒、とか、売ってませんかね、自販機とかさつきありましたよね」

東 「あ、インフォメーション」

と同時に冊子を取り、手が触れ合う。そのまま手を離さない。

二人「！」

緑 「……興味は、すごくあるんですよ。妹なんか、とっかえひっかえで。羨ましいなって」

東 「一人の男が、複数の女性とそういうことしてるのみると、悔しくてしょうがないんですよ」

緑 「でも本当は、最初は好きな人として、夢見てました。恥ずかしい」

東 「それは……僕も同じです」

二人、ぎこちなく、ゆっくりとベッドに倒れ込む。

緑 「あ。出なかったらごめんなさい、おしっこ」

東 「は？」

暗転。

■ 〈お姉様と私〉 202号室

同じ作りの部屋だが、違う部屋。将多、入ってくる。学生風だ。iPhoneで電話する。

将多「あ、増山です。あ、はいそうです、今部屋入りました。にいまるにです。そうです。にひやくに。はい。あ、オプシヨン。オプシヨンはなしで。はい。あ、そうですコースは90分です。え、120分に？ いや……予算が。あ、はい。あ、はい、すいません。あ、じゃあお待ちしています。はい。はい。どもすいません。失礼します」

と切る。落ち着かない将多。

将多「ゴム。……あつた。あれ、一枚しかない」

とゴムの位置を確認したり。

将多「ふう(と落ち着かせる)」

チャイム。ピンポーン。将多、服を整え、ドアを開けに行く。

ドアを開けると、沙樹が立っている。もさい女である。

将多 「!?!」

ドアを閉める。チャイム、何度も鳴る。将多、諦めて開ける。

将多 「……」

沙 樹 「入るよ?」

将多「なんだよ。なんでお前がここにいるんだよ。なんでここが分かった」

沙 樹 「何やってんの、ミニ」

将多「答えるよ俺の質問に」

沙樹「誰か来るの？」

将多「……」

沙樹「誰。誰が来るの。新しい女？」

将多「違うよ。そういうんじゃない」

沙樹「じゃなに。なんでこんなラブホテルにいるわけ？」

将多「ラブホじゃないよ。ホテルだよ、ただの」

沙樹「似たようなもんじゃない。だいたい将多一人暮らしじゃない。なんでホテルに泊まる必要があるわけ？ ……

絶対誰か来るんですよ。誰かと待ち合わせしてるんで

しょ。私、その人が来るまで帰らないから」

と座る。

将多「おい……」

沙樹「誰。誰が来るの」

将多「それは、その……」

沙樹「誰」

チャイム。ピンポン。

二人「！」

将多「……」

沙樹「早く。開けなよ。誰か来たよ」

将多「あ、いや。間違いじゃないかな」

沙樹「開けなよ」

将多「や、お前、開ければ？」

沙樹「や、別に」

沙樹「女の私が姿を見せれば、ドアの向こうの女が私を見て一

瞬にして状況を察知して、それで帰って行ってくれる

のを期待してる。バレバレ」

将多「そんな（わけないよ）」

チャイム。ピンポン。

沙樹「ほら。あけな。早く」

将多、覚悟を決めて開ける。

ピザ屋「こんばんは。ローマピザです。』♪大きい！ 美味し

い！ すごく早い！ ローマ、ローマ、ローマピザー！』

将多「(沙樹に) ほら。間違え。な？」

ピザ屋「間違い？ ピザ、頼まれてないっすか」

将多「頼んでない。間違いだよお」

ピザ屋「困ったなあ。部屋番号マジで分かんないじゃん。分かり

ました、すみません。失礼します」

沙樹「ちょっと待って。はあーん。カワイイ顔してるねえ。こ

ういう顔タイプだもんね。あんた、将多の何」

ピザ屋「はい？」

沙樹「彼の何って聞いているの」

ピザ屋「ピザ屋ですけど」

沙樹「ああ？ しらばっくれてんじゃないわよ」

ピザ屋「……何すか？」

将多「いやいや、この人ホントにピザ屋だから。どもども。す

いません」

と押し出し、ドアを閉める。

将多「な、誰も来ないだろ？ よし帰ろう」

沙樹「はあ？」

将多「俺もう用事終わったから。帰ろう」

沙樹「見てたのか」

将多「違うわよ。お連れ様202号室ですうって受付で言われ

たのよ」

将多「え。あー……」

沙樹「何？ 終電で来て、そして今もう終わってる用事って何」

将多「あれだ。あの……下調べ」

沙樹「下調べ？ 何の」

将多「あれだよ。俺、ほら、映画の」

沙樹「どんな映画？」

将多「とにかく帰ろう」

沙樹「どんな映画撮るの？ 教えて。脚本見せて」

将多「帰るぞ。うちにあるから脚本。な？」

沙樹「帰らない。絶対誰か来る。来なくても朝までいる。それから脚本見る。」

将多「朝までって……。あ、ちよっとトイレ」

沙樹「携帯、見えるところに置いて」

将多、あきらめる。

将多「……お前、なんで来たんだよ」

沙樹「新幹線だけど」

将多「そうじゃなくて。何しに来たんだって」

沙樹「何しにって。将多全然連絡付かないじゃん。メールも全然返ってこないじゃん。なんで」

将多「バイトが忙しくて」

沙樹「前はさ、バイト中でもコソコソいっぱい返してくれた」

将多「てかさ、来るなら来るって先に言えよな」

沙樹「何回も言ったじゃん、行きたいって。でもその度に毎回将多がさ、なんだかんだ言って来るとか言ってたさあ。

なんなの？ ……すごい……寂しかったんだから」

将多「だからって、勝手に来るなよ。こんなとこまでさあ。どうやって来たんだよ。なんでここが分かった」

沙樹、バッグから鍵を出す。

将多「うちの鍵？」

沙樹、パソコンを出す。

将多「あそれ俺の！」

沙樹「家行ったらいなかったから、パソコン開いて」

将多「なんでパスワード知ってんだよ！」

沙樹「iPhoneを探す」

将多「!?!」

と自分のiPhoneを見る。

将多「ジョブス！」

沙樹「ねえ。私たち、終わり？」

将多「……」

沙樹「終わりなの？ マジで？ ねえ、マジで？ こんなに……」

……こんなに遠距離頑張ったのに。私必死にバイトしてお金貯めてんだよ？こっちに引越そうとか思ってた。

それなに……何やってんの。将多こっち来て何やってんの。ねえ、なんとか言ってくれよ。なんで。なんでこうなっちゃったの。ねえなんで！」

将多「……ごめん」

沙樹「ごめんって……。そうよね、映画とか撮ってたら綺麗な女優さんとか周りにいっぱいいるもんね。監督さんってモテるもんね」

将多「モテないよ。こんなインディーズの監督なんて。誰も相手にしてくれない」

沙樹「じゃあ誰よ」

将多「誰でもないよ」

沙樹「どんな人。何やってる人？ 写真とかないの？」  
とiPhoneを取る。将多、慌てて取り返そうと。

将多「やめろ。ないよ、ないって、その人の写真は」

沙樹「!?!」

将多「!」

沙樹「さいあく……。マジでさいあくだから……」

将多「……」

沙樹「……。殺していい？その女」

将多「!？」

沙樹「殺すわマジで。(怒鳴る) ああもう、ムカつく!」

ピンポン。

二人「!」

沙樹、ドアに突進。それを抑える将多。もみあつて、ドアを開く。

ヒメノ「?……こんばんは。ああ、やっぱりオニイサンだったんだ。名前見てそうかなあつて思つて。(沙樹を見て) ども。今日はそういうあれですか。そっか……うちのコ?」

と入ってくる。セクシーな格好だ。

ヒメノ「ちよつと、メールしていいですか」

と椅子に座つて、携帯をいじる。沙樹、その携帯を奪う。

ヒメノ「すいません、連絡のメールなので」

沙樹「なんの連絡ですか」

ヒメノ「なんのつて。だつて三人でしょう? 聞いてないですから。受けてオッケーかなつて。まいつか聞かなくて。誰も損しないもんね。さて、シャワー浴びます? もう浴びました?」

沙樹「なにあんた」

ヒメノ「あ、ヒメノです」

沙樹「なにヒメノ。ヒメノなに」

ヒメノ「名字はないです」

沙樹「は?」

ヒメノ「ないでしょ普通。あなたは? なんて呼べばいいですか」

沙 樹「稲葉沙樹だけど」

ヒメノ「イナバサキちゃん。感度良さそう」

と触る。

沙 樹「はふー！」

ヒメノ「いいねえ。シャワーは？ 浴びました？」

将 多「いや、その」

ヒメノ「じゃーあ、三人で入りましょっか」

沙 樹「あんたもしかして……風俗嬢？」

ヒメノ「そうですけど。え、警察!？」

と逃げようと。

沙 樹「違います。え、てことはさ。……なんだ……。なんだ……

…そうだったんだ。だったら早くそう言つてよ。いや、

そりゃムカつくよ？ あり得ないよ？ でもさ、これ

風俗じゃん。なんだ……私てつきりマジで好きな人で

もできたのかと思った。なんだ……。もうー」

ヒメノ「これ、つてなあに?」

沙 樹「え」

ヒメノ「サキちゃん今、これ風俗じゃん、つて言ったよね。これ

つて何ですか。私ですか？ それとも、デリヘルなん

ていう卑しい職業全般を指したんですか」

沙 樹「何言つてんのもうめんどくさい。よし将多。帰ろう。さ

っさとお金払って、うち帰ろ。お金払えば大丈夫です

よね?」

ヒメノ「まあ。なに、サキちゃんは素人さん?」

沙 樹「そうです。素人です」

ヒメノ「もしかして、そういう?」

沙 樹「私の彼氏です。何度もお世話になったみたいで」

ヒメノ「あー。ふうん。それはそれは」

タバコを取り出す。

ヒメノ「いい？（沙樹に）」

沙樹「いえ」

ヒメノ、タバコに火を点ける。

沙樹「ほら。お金払って。行くよ。おいくらですか」

ヒメノ、三本指を立てる

沙樹「たつか。この指輪より高いじゃん！ ねえ、将多がくれたこの指輪より高いよ？ どういうこと？ しかも初めてじゃないでしょ？ 何回やったの？ 三回？ 五回？ それだけあったら私東京これるじゃない。部屋の敷金とか出るじゃん。もう信じられない。ホントバカバかしい。はあ……。つたく。ほら行くよ。将多。早く。何してんの。行くよ」

将多「俺は……いいや」

沙樹「何が」

将多「沙樹、一人で帰れよ」

沙樹「へ？」

将多「俺は、この人と会うためにここに来たから」

沙樹「はは、なに言ってるの……」

ヒメノ「私、外出てみましょうか」

沙樹「そうして下さい」

将多「ダメです。いて下さい」

沙樹「もしもし？」

将多「前払いですよ。これで、90分。いて下さい」

とお金を払う。

沙樹「何してんの。ねえ、何してんの！ なにこれ、どういう

こと？ ねえ将多。ねえ！」

将多「（目を合わさず）お前こそ何してんだよ。こんなとこま

で来て。岡山にいろよ」

沙樹「将多……？ ウソでしょ？ 将多、この人……？ この人なの？ ねえ？ だっておかしくない？ この人風俗嬢だよ？ お金もらってセックスする人だよ？ そんな人……好きになってどうすんのよ」

ヒメノ「あら」

沙樹「好きじゃないよね？ こんな人好きじゃないよね？ 好きっていうの本気っていう意味じゃないよね？」

将多「俺は本気だ」

ヒメノ「あらあら」

沙樹「なに言ってるの、あり得ないでしょ」

将多「なんであり得ねえんだよ。本気になっちゃいけねえのよ。ヒメノさんの仕事がそういう仕事だから、俺は本気になっちゃいけねえのか」

沙樹「何言ってるの？ 私たち、付き合ってるのよ？」

将多「別れてくれ」

沙樹、将多をビンタ

ヒメノ「(わお)」

沙樹「自分で何言ってるのか分かってる？」

将多「分かってる」

沙樹「どこがいいの！ こんな女のどこがいいのよ！」

将多「分かんないよ。人を好きになるのに、どこが、とかないだろ」

沙樹「あるよ。どこよ、どこが好きなのよ」

将多「全部だよ」

沙樹「全部って。あなたこの人の本名知ってるの？ どこに住んでるかとか知ってるの？」

将多「……」

沙樹「バカじゃないの!？」

将多「バカでいいよ……」

沙樹「なんであんたが拗ねるのよ!　いま将多に拗ねる権利ないから」

将多「セックス」

沙樹「なに?」

将多「セックスが……すごくいいんだ」

沙樹「それがなによ」

将多「だから、好きになった」

沙樹「セックスがよくて、それで、好きになったの?　頭おかしいんじゃない!？」

将多「なんでだよ。セックスで人を好きになっちゃいけないのかよ!」

沙樹「いけないわよ。順番がおかしいんじゃない。普通、好きになってからセックスするんでしょうが」

将多「恋愛に順番なんて関係ないだろ」

沙樹「それっぽいこと言ってんじゃないわよ。変態」

将多「変態で結構だ。俺は変態なんだ。そういう、なんていうか俺の変態性を、この人は、分かってくれるんだ」

沙樹「それは。商売だから。この人はあなたからお金もらってるんだから、そりゃ何だって受け入れるわよ」

将多「俺は。俺の変態性を……沙樹には言えなかった。沙樹に言ったら嫌われると思った。それって、何なんだ。この人は金で俺を受け入れて、沙樹は、たとえば愛で俺を受け入れてくれるのか」

沙樹「そりゃ、その変態つてのが何かによるわよ」

将多「なんでだよ……よるなよ!」

沙樹「どういう、変態なのよ」

将多「……言えない」

沙樹「なにそれ」

将多「言えないんだよ。恥ずかしくて。言ったらなあんだってなるかもしれないけど、この、言えないっていうのもどかしい状況が、まさにすでに愛じゃないんだよ」

沙樹「何言ってるか分からない。もう何これ」

ヒメノ「あの」

沙樹「黙ってて下さい!」

ヒメノ「オニイサンに」

将多「将多です」

ヒメノ「やりますか? やらないですか? 私前のお客様でシヤワー浴びてるから準備はオツケーんですけど」

将多「……」

沙樹「何迷ってるのよ」

将多「やります」

沙樹「はあ!?!」

将多「だって三万だよ?」

沙樹「そうよ三万よ。この指輪一万八千円」

将多「なに調べてんだよ」

沙樹「ティファニーなんだから値段くらいすぐ分かるわよ。将多言ったよね? すごいバイトしてお金貯めたって。あれウソ?」

あれウソ?」

将多「ウソじゃないけど」

沙樹「じゃ、三万って」

ヒメノ「ねえ、ローション、使う?」

将多「ぜひ」

沙樹「ローション!?!」

ヒメノ「エネマグラは?」

将多「はい」

沙樹「エネマガラってなに？ エネマガラってなによ！」

将多「ググレよ！」

ヒメノ「私、雨の日ってダメなのよね。なんかムラムラして。それにさっきのお客さんがあんまりあれだったから。見て、ストッキング履いて来た」

将多「はい、知ってます」

沙樹「ちよつと。なんなの。なんなのこれ！」

と携帯でググった。

ヒメノ「はい、じゃあこつち来て下さい。ほら、いらっしやい」

と手を引いてベッドに座り、将多を誘う。将多、座る。

沙樹「なにやってんの？ あんたなにやってんの」

ヒメノ「あ、お湯だ。お湯がいるね」

と立ち上がろうとすると、将多の横に、沙樹も座る。沙樹、将多、ヒメノの順。

沙樹「私も、準備できてるから（緊張）」

将多「はい？」

沙樹「エネマなんとかはよく分かんないけど、私も準備大丈夫だから。抱いていいから」

将多「ええ？」

沙樹「どつち抱く？ どつち抱くの！」

ヒメノ「あは。どつちにする？（エロく）。……まあ、将多さんなら二人とも満足させてくれそうだけど。（沙樹に）上手よねえ、この人」

沙樹「え？ そんなの……分かりません」

ヒメノ「分からないの？ うそ。私この仕事で初めてイカされちゃった、この人に」

沙樹「え……（ショック）」

ヒメノ「あれ。いったことないの？」

沙樹「あ、ありますよ、それぐらい」

ヒメノ「舐めるの上手よね」

沙樹「舐める？ 舐める！？ してもらったことない」

将多「あ、いや、それは……」

沙樹「私のは舐めないで、この人は舐めるの?!」

将多「だって……」

沙樹「だって何よ」

将多「沙樹は、なんていうか、その……」

沙樹「なに。もしかして臭うの？」

将多「違う。臭わない。そうじゃなくて、つままない……」

沙樹「つままない？ 何がよ！」

ヒメノ「セックスでしょ」

沙樹「は？ セックスに面白いもつまらないもないでしょう」

ヒメノ「そんなこと言ってるから（笑）」

将多「沙樹は、なんか、その、楽しくないんだ。リアクション

とか、声、とか」

沙樹「ごめん、意味分かんない」

将多「ヒメノさんは、その、リアクションも素敵だし、なんて

いうか、とても感じてくれるっていうか、悶え方、っ

ていうの？」

沙樹「演技だから。この人がやってるのは、演技」

将多「じゃあ沙樹も演技すればいいじゃん」

沙樹「なんで。心そのままいさせてよ」

ヒメノ「私、半分は演技だけど、半分は心のままよ。勝手に体が

動いちゃう。声も出ちゃう。だってこの人上手だし」

将多「いや。ヒメノさんこそ、お上手っす」

ヒメノ「あらありがとう」

沙樹「……上手いって、どう上手いのよ」

将多「そりゃ、まあ、手、とか、指の這わせ方、とか、舌使いとか、もろもろ」

ヒメノ「まあ、プロですから。いろいろ鍛えて戴きましたから店長に」

将多「店長と、ですか」

ヒメノ「やらないわよ店長とは。こつちが技を教わるときは、店長はいっちゃダメなの、いかないの。それが礼儀なの」

将多「そうなんだ」

沙樹「安心してんじやないわよ。他の客とやりまくってんだから」

将多「そうか……」

沙樹「凹んでんじやねえよ！　じゃあ、私も教えて下さい」

ヒメノ「ん？」

沙樹「私も。店長に教わった技を、教えて下さい」

ヒメノ「ええ？」

沙樹「だってそんな……悔しいじゃないですか、セックスのテクニックで男取られるなんて」

ヒメノ「テクニック。テクニックだけの話なのかなあ」

沙樹「セックスで人に惚れることがあるんなら、私にだって力の余地はあるっていうか、私だって惚れさせたいじゃないですか。この人がダメでも、その次の人とか、虜にしたいじゃないですか」

将多「!？」

ヒメノ「なんか必死」

沙樹「必死の何が悪いんですか」

ヒメノ「かわいいなあって思って」

沙 樹「そんな上から……。どうせ私はこの人しか知りませんよ」

ヒメノ「かわいい。健気じゃない彼女」

将 多「いや、その……」

ヒメノ「いいなあ健気な女。私にもそんな時代があった」

沙 樹「歳そんな変わらないですよね？」

ヒメノ「そうかな。でも、私この仕事始めたの早かったから。高

校の時、家でいろいろあったから」

沙 樹「そうなんですか……」

ヒメノ「私、なんだかあなたのこと応援したくなってきちゃった」

沙 樹「なんか、他人事ですね」

ヒメノ「そりゃ私は商売だもの、他人事に決まってるじゃない。

お金さえもらえりゃ何でもいいんだもん」

将 多「え？ え？ え？」

ヒメノ「よし。じゃあ教えてあげよう。あと70分あるから。み

つちり教えてあげる」

沙 樹「宜しくお願いします」

将 多「や、ちょっと」

ヒメノ「初級編ね。まず二人、向き合います。キスは、しませ

ーん。最初にしてはいけません」

沙 樹「え？」

ヒメノ「抱き合ったり、体に触れ合うのも、あと」

沙 樹「ええ？」

ヒメノ「一番最初に、もうあそこ行くの。男の人はそれが一番喜

ぶから」

沙 樹「初級編ですかこれ！」

ヒメノ「女とは違うのよ。感じるとここしかなないんだから。で、

手はこう。指を立てて、そっと置くの。で、這わせる

ように、撫でる」

と指を這わす。

将多「おうふー！」

ヒメノ「やってごらん」

沙樹、やってみる。

将多「……」

沙樹「ダメ？」

将多「ダメ」

ヒメノ「もつと、こういう感じ」

と同じ事を沙樹にする。

沙樹「……あんっ。やべ、声出ちゃった」

将多「いいね、今の」

沙樹「うるさい黙って。次は？」

ヒメノ「脱がし方なんだけど、これは私だけの専売特許ね。昔の

お客さんに教わったやり方なんだけども。口だけ」

と歯でシャツのボタンを外しに掛かる。

将多「！」

沙樹「すげっ。うまっ！」

ヒメノ「どう？」

将多「めっちゃいいっす……」

ヒメノ「やって」

沙樹「はい」

とやる。

沙樹「ちよつと、動かないで。ちよつと！もう！できないじゃ

んじつとして」

将多「痛い！」

ヒメノ「まあちよつと難しいかな。このシャツならできるかも」

沙樹、将多越しに、ヒメノのシャツを歯で外す。

ヒメノ「ああ、上手上手。うん、まあそんな感じ」

沙樹「はあ、はあ、はあ……（興奮）」

ヒメノ「で、その後にやっと、キスよ」

沙樹「はい……お姉様」

ヒメノ「アゴをそっと包むように持って。そのまま後頭部に手を

やって、髪を握る」

沙樹、将多のアゴではなく、ヒメノのアゴを持つ。

ヒメノ「……」

将多「？」

沙樹「……」

ヒメノと沙樹、将多越しに見つめ合って……ベッ

ドに倒れ込む。

暗転。

コンビニ店員の章太郎、菜々子が、後ろ手に縛られて  
いている。ユウ、拳銃を持ってイライラしている。

アサミ、バッグの金を数えていた。

アサミ「48、49、50、51、52、53」

ユウ「いくらだ」

アサミ「353万」

ユウ「たったの？ 五件も回って？」

アサミ「まあ、コンビニだから」

ユウ「うるせえなあ、壁薄すぎだろ！」

と隣からチャイムが何度も聞こえた。

アサミ「ねえ、しよ」

ユウ「あ？ いま？」

アサミ「しようよ。疲れちゃった」

ユウ「いまそれどころじゃねえの見てわかんねえ？」

アサミ「ごめん……。どうすんの、これ（二人）」

ユウ「……殺すか」

菜々子に銃を向けた。

菜々子「！」

章太郎「僕だけ！ 僕だけ助けて下さい」

一同「？」

章太郎（オタク的早口で）あ、田代章太郎と申します。僕には  
いっばいでつかい夢がありまして、その、将来、なん  
かこう、ビッグになるんです。僕の人生、これからな  
んです。それに、まだ童貞なんです。その点この女は  
もう、全然、全然やりまくり。周りにチャホヤされて、  
やれインスタグラムだ、やれいいねがいくつ付いたの

だって、十分人生楽しんでんすよ。周りの男に色目とか使って、なんかもう、周りに全部やってもらおうんすよね。どうせセックスなんかやりまくってんだ」

菜々子「あんたなに言ってるの」

章太郎「要するにね！ そんな女と僕と、どっち殺したいですかって話なんです。そりゃそっちでしょう？ 人質は一人で十分ですから。僕は男ですけどね、腕力もありません、喧嘩も弱つちいです、ですからお二人の邪魔はしません。殺すなら、そっちを殺して下さい」

菜々子「田代君！ あんたねえ！」

章太郎「だいたい僕はね、本来あの時間はシフト入ってなかったんです。風邪で休んだ猪越くんの代わりだったんです。何だったら今から猪越くんここに呼びますから。呼んだら猪越くんと代わってもいいですか」

ユウ 「おもしれえなお前」

章太郎 「ありがとうございます！」

ユウ 「殺すならお前先に殺すわ」

章太郎 「いやそれはちょっと待って下さい！ 猪越くんにして下さい！」

パトカー、通る。

ユウ 「シッ！」

菜々子 「あんたどういうつもりよ」

章太郎 「あんたが死ねばいいんだよ。あんたみたいに男に寄生して生きてるような女はみんな滅びてしまえばいいんだ」

ユウ 「うるせえ黙れ！」

ピンポン。

一同「！」

ピンポン、ピンポン、ピンポン！

ノック。

ユウ 「声出したら、殺すからな」

菜々子と章太郎を死角に隠し、ユウ、目出し帽をかぶって、ドアを開ける。

ピザ屋 「♪大きい！ 美味しい！ すごく早い……ローマ、ローマ……」

ユウ 「……」

ピザ屋 「頼まれてないですよ……。すみませんでした！」  
ドア閉まる。

ユウ 「なんだ今の（笑）」

アサミ 「えー。もらえばよかったじゃーん。アサミお腹すいたー。  
エッチしないんだったら何か食べよ」

ユウ 「そうだな。なんか出前取るか」

菜々子 「うああー！」

とユウに体当たりする。銃が田代の足元に飛ぶ。

菜々子 「取って。それ取って！」

章太郎、恐くて動けない。

章太郎 「むりむりむりむり！ なにやってんだよ篠崎さん！」

菜々子 「早く取ってよ！」

ユウが銃をゆっくりと拾い、菜々子を手の甲で平手打ち。

菜々子 「くはっ！」

と倒れる。

アサミ 「痛そー」

ユウ 「勇気あんなあ、ネエちゃん」

と近づく。

菜々子 「ごめんなさい！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

と小さくなる。ユウ、菜々子の髪を掴んで顔を上

げる。

ユウ 「ああ、いい顔だ」

鍵穴を回す音。

一同 「!?!」

宏 治 「あれ、鍵空いてる。……あ。間違えました、すみません」

と酔っていて、消えた。

アサミ 「うける（笑）」

ユウ 「なんなんださつきから!」

アサミ 「え、なに?」

ユウ 「おかしいだろ、二人も間違えるなんてことあるか? 隣

もピンポンピンポンうるせえし」

章太郎 「警察だ……。警察ですよ!」

ユウ 「ああ?」

パトカー、通り過ぎる。

ユウ 「!……!」

アサミ 「通り過ぎた」

章太郎 「いや違うね。警察だよ。警察が来たんだ。やった!」

ユウ、睨む。

章太郎 「あ、人質をお取りになるならぜひあれを。僕は真っ先に

開放して下さい。そしたらほら、警察もほら、お二人

が人質を殺す意思はないんだなって思うじゃないです

か。僕は絶対に口を割りません。口硬いですから。お

二人の人相は、ずっと目出し帽被ってたから分かりま

せん!て言います。それに大丈夫です、このホテルは

防犯カメラなかったですから」

ユウ 「え。そうなのか」

章太郎 「ええ、ありませんでした! ですから、お二人の顔はぜ

ったいバレません。あの女が言わない限り」

菜々子「は!?!」

章太郎「あの女口軽いんすよ。もうね、バイト先でもずっと喋ってるんです。メイクがどうだ服がどうだ男がどうした友達がどうしたってね。もうね、バックヤード入っても噂話とかばっかっす。飯食えつつうの。時間ねえんだから飯食えつつうの」

アサミ「ちよつとうるさいあんた。ねえ、どうすんの。どうすんのよ!」

ユウ「分かんねえよ、考えろ、考えろ。まず、外にパトカーだ」  
アサミ、カーテンを開けに行く。

ユウ「見るなバカ!」

アサミ「いないよ?パトカー」

章太郎「いや、あれは覆面ですね。覆面パトカー」

と一緒になつて外を見ていた。

ユウ「マジかクソ。つてことはやっぱあのピザ屋。警察だったんだな。俺たちがここにいいのかどうか偵察に来やがった」

アサミ「じゃさっきのオジサンも?」

ユウ「ん、おかしいな。二人も偵察する必要ねえな」

章太郎「いえ。警察は必ず二回偵察します。情報に間違いがないかどうかを確認するために」

アサミ「詳しい。それでどうすんの」

章太郎「そりゃ、狙撃か、突入じゃないすか?」

ユウ「狙撃? 突入!?!」

アサミ「突入つて、どわーんとかなるヤツ? 映画とかでよく見るやつじゃん。窓とかから大勢がわーつて入つて来てるよ! やばいじゃん。ねえ、やばいじゃん!」

ユウ「うるせえんだよ!」

とアサミの腹を蹴った。

アサミ「うっ……!!」

ユウ 「静かにしろ。な？ 考えたいから」

アサミ「うう……ごめんなさい」

ユウ 「こつちには人質がいる。どうにかなる」

アサミ「そっか……人質とったのって、作戦だったんだ。やっぱ

ユウ君すごい。計算だったんだ」

ユウ 「あ、当たり前だ。俺がへマするとも思ってたか」

アサミ「まさか。信じてたよ最初から。来て、ユウくん」

ユウ 「アサミ」

アサミ「ユウ君。よしよし」

とアサミの胸に抱かれる。甘えた子供のような。

今にもことが始まりそうだ。

菜々子「(鼻で笑い、ボソツと) バカじゃないの」

アサミ「……何か言った？」

菜々子「バカじゃなかったの」

章太郎「篠崎さん、今じゃないです」

菜々子「今だよ。どうせ警察が来てこいつら捕まんだから」

章太郎「いいから黙って！」

菜々子「うるせえ。今のうちにぼろくそ言ってやるわよ。バーカ

バーカバーカ。死ね、ばばあ、気持ちわりいんだよ！」

章太郎「黙って篠崎さん。今じゃないから。黙ってて！」

菜々子「うるせえ、おめえが黙れ。あんたさあ、なんなの？ 私

になんか恨みでもあんの？」

章太郎「ないから黙って。黙れって」

ユウ 「静かにしろお前ら」

菜々子「助けてえ！ 助けてえ！ 誰かあ！」

章太郎「やめるやめるやめるバカ女バカ女バカ女！」

ユウ 「うるせえ……うるせえうるせえうるせえ！」

と銃を撃ってしまふ。パーン。

一同 「!?……………」

壁に穴が開く。

菜々子 「……本物」

章太郎 「偽物だと思ってたの？ 篠崎さんあれ偽物だと思ってた

の？ 一目でわかるじゃん。どう見てもグロック17

じゃん。見りゃ分かるだろ！」

菜々子 「分かるわけないでしょ！」

アサミ、壁に開いた穴を覗く。

アサミ 「ねえ。誰か倒れてるよ。死んでる？ あれ死んでるよ

ね？ あれ、ユウが撃った弾で死んだんだよね？」

ユウ、覗いて、

ユウ 「知らねえよ。俺は知らねえよ。何も知らねえ」

アサミ 「だって胸から血出てるし。あの人さっきの人なんじゃない

いの？ 警察殺しちゃったんじゃないの!？」

ユウ 「見てんじゃねえよ!！」

と引き剥がし、

ユウ 「このクソボケ安ホテルがあ!！」

と何か蹴る。足を打った。

ユウ 「いってえ! くっそ!！」

アサミ 「どうする。どうするの! やばいよ。やばいって!！」

ユウ 「……逃げよう」

アサミ 「うん、ついてく! あ、でも、外、警察だらけなんじゃ

ないの? 出たら一発で捕まるんじゃないの?」

ユウ 「んなこと分かってんだよ! おめえもなんか考えろ!！」

アサミ 「うん、考える!！」

章太郎 「……ふふ。はは」

ユウ 「あ？ なんだよ」

章太郎 「いえ、別に」

ユウ 「てめえ、なんかアイデアあんのか？」

章太郎 「ありませんよ」

ユウ 「言えよ」

章太郎 「ないですから」

ユウ 「いいから言えや」

章太郎 「いやです」

ユウ 「あんじゃねえかよ。教えろ！」

章太郎 「じゃあ僕だけ外に出してくれたら教えてあげます」

ユウ 「てめえふざけんな」

章太郎 「じゃあ教えません」

ユウ 「殺すぞ」

章太郎 「どうぞどうぞ！」

ユウ、章太郎を殴った。

章太郎 「う……。こ、殺せばいいさ。僕を殺したら作戦も消えま

すからね。銃声も鳴り響く」

ユウ 「どうやるんだ」

と枕をサイレンサー代わりにして、銃を章太郎に  
向けた。

章太郎 「……。お二人が、人質になればいいんです」

一同「！」

ユウ 「アサミ、これ構えてろ」

と銃を渡し、菜々子の後ろ手を解き、脱がせる。

アサミ「ねえ、どういこと？」

ユウ 「まだ分かんねえのかよ。俺らがこの制服着て、外に出る  
んだよ。そしたら人質だと思われる。で、隙を見て、  
逃げちゃえばいいんだよ」

アサミ「頭いい！ ユウくん頭いいね！ で、こいつらが犯人に  
間違われて、警察に殺されちゃえばいいんだ！」

ユウ 「そういうこと」

菜々子「あんたなに考えてんだよ！」

章太郎「……」

菜々子「田代君さあ。ほんとに私のこと好きでしょ」

章太郎「!？」

菜々子「バイト中、いつつも私のこと見てるよね。じとーって。  
胸とか、足とか？ めっちゃ見てくるよね。いつつも  
目、行っちゃってるよ？ 何妄想してるの？ 私でど  
んな妄想してるの？ ……きも。死ね。てかさ、私の  
こと好きだったらさ、あんたが死ねばいいじゃん。あ  
んたが死んで、私が生き残れば、あんた幸せでしょう  
が」

章太郎「いや、全然。(ユウに) あ、あの、ちゃんと縛った方が  
いいと思います。(菜々子に) 篠崎さんのことなんか全  
然好きじゃないです。勘違いしないで下さい。自意識  
過剰なんだまったく。これだからヤリマンは」

菜々子「ヤリマンじゃねえし！」

章太郎「ヤリマンでしょう。バイト先みんなとやってんでしょ。

聞いて下さい。この女、めっちゃセックス好きらしい  
っすよ。しかも上手いんですって！ おっぱいおっき  
いし、多分最高なんじゃないすかね！」

ユウ 「おう」

菜々子「てめえ！ なんでそんなことばっか言うんだよ！」

菜々子は解かれ、アサミが制服を着て縛られてい  
く。

アサミ「ねえねえ。なんかこれ興奮する。アサミ、けっこうこう

「うの好きかも」

ユウ 「マジか。おめえ変態だもんな。ギチギチにしてやるよ、怪しまれないように」

篠崎、ドアへ走る。

が、すぐに捕まって投げられる。

菜々子「うう！」

ユウ 「ダメダメダメ。いいか？ 俺がこの銃で、あのデブを殺す」

章太郎「え？」

ユウ 「でその銃をお前が握る。お前の指紋が、付く。実はお前は、俺たちの仲間だ。ところが仲間割れして、お前が、人質を、殺した。そんな筋書きでいこうと思うんだけど。でもその前に……」

ユウ、菜々子に銃を突きつけ、体をまさぐる。

アサミ「なにやってんの？ ユウくんなにやってんの！」

ユウ 「いっぺんこういう女抱いてみたかったんだよ。なあ、どうだ、俺と一緒に逃げねえか？」

アサミ「は？ ユウくんなにやってんの！」

ユウ 「あんたが望むなら、この二人殺してもいいぜ？」

アサミ「ユウくん！」

と行くが、蹴飛ばされる。

アサミ「うう……！」

ユウ 「(章太郎に) お前、そこで見てろよ。いいか、世の中ってのは、力がすべてなんだ。力を持っている奴が、強え男だけが、いい女を抱けるんだ。力のない奴は、弱え奴は、それを見てせんずりこいてりゃいいんだよ。あ、縛られてっからせんずりもこけねえな(笑)」

章太郎「今にも警察が来ますよ」

ユウ 「どうせ捕まんだよ！ だったらよ！ 最後にこんないい女犯してえじゃねえか！ おめえ孕まして俺の子供産ませてやるよ！」

と菜々子を襲う。が、全く抵抗しない。

ユウ 「なんだお前。怖くねえのか」

菜々子 「暴れたら怪我するだけなんで。馴れてんだよね、こういうの」

ユウ 「いいじゃん、素直で。楽しもうぜ、ヤリマン」

菜々子 「私セックス嫌いだから」

ユウ 「あ？」

菜々子 「男ってみんな私を抱きたいだけなんだよね。そのために優しい言葉かけてきたり、お金使ったり、暴力使ったり、いろんなことして。それで一発やったらさ、みんな満足そうな顔して去って行くんだよね。自尊心？ っていうの？ 満たされるらしいね、私とセックスすると。誰一人、私のことを本気で好きになった人はいない。みんなやり逃げ。私知ってた。男にとって私は、性の対象でしかないって。誰も私を人間として見てくれない」

章太郎 「(大泣き) うわああん。篠崎さあん。ああああん！」

ユウ 「(吹き出して) 見ろよあの顔！ 情けねえ顔だなあ。あいつさ、俺らが店襲った時さ、結構裏口に近い所にいるんだよ。すぐに逃げられる位置にいたの。それが(笑)、腰抜かしてさ、逃げらんねえでやんの。ほっといたら通報されちまうと思って連れてきたんだけどさ、うけねえ？ さっさと逃げたりやこんな目に遭わなくて済んだのに、間抜けなヤツだよなあ。……俺はちげえぜ？ 俺はお前を愛してる。性の対象だなんて思っ

てねえよ。たっぷり愛してやる。お前も本当は、俺みたいな強い男が好きなんだろう？」

菜々子「私は誰のことも好きにならない。男は全員、クソだから」

ユウ「うるせえ！ 分かってやるよ！」

と覆い被さって。

銃声！

アサミがユウを撃った。

ユウ「……ええ？ 冗談だよ。冗談」

アサミ「ユウくん。それはダメだよ。それだけはダメだった」

ユウ「だから冗談だった。……救急車呼んでくんねえかな。な

あ、頼むよ。救急車」

アサミ「ごめん。ごめんね、ユウくん」

ユウ「死にたくねえよ。全然死にたくねえって。もつと、金を

稼いでさ、もつとき。のしあがつてさ。もつとき」

と死ぬ。

アサミ「……ケチだったよね、ユウくん。せこいんだよ。ほんと

せこい。なんていうのかな、発想がこじんまりしてる。

だって銃持ってるのにコンビニ強盗って。銀行とか郵便局とか行こうって私言ったのにさ。ホテルもさ、百

円でも安いラブホ探しちゃって。ねえ。これで海外行

って、どれくらい暮らせると思うっ？」

と菜々子に金を見せる。

と菜々子に金を見せる。

菜々子「知らねえよ」

アサミ「私、あんた大嫌い」

と銃を向け、引き金を引く。

その時、章太郎がパッと菜々子の前に来て、身を

挺して守る。

菜々子「!？」

が、弾切れであった。

アサミ「……こんなとこまでケチんないですよ」

章太郎「外には……警察はいません」

アサミ「？」

章太郎「覆面もいません。全部嘘です。ですから、今すぐこの部

屋から出て行って下さい。お願いします」

菜々子「田代君もしかして……。逃げられる場所にいたのに逃げ

なかつたって、わざと？ わざと捕まって、私と一緒に

にここに來たってこと？ で、あの男が私に來るよう

に仕向けて、二人を仲違いさせた」

章太郎「……」

菜々子「あたあ！」

とアサミを蹴る。アサミ、気絶する。

菜々子、縛られたままの章太郎に飛びかかる。

章太郎「え、ちよっと！」

菜々子「愛してる」

と床に押し倒す。

暗転。

■〈池田屋なの〉203号室

近未来のような明かり。もうもうとあがる煙。新

選組の土方歳三、沖田総司、刀を振り回しながら

乱入する。

土方「桂はどこだ桂は！」

沖田「桂小五郎はいずこに！」

土方「小五郎、出てこい！……あれ」

沖田「……やけに静かになったな。局長、近藤局長！」

土方「返事がない。しかし静かだ。他の隊士はどこ行った」

沖田「池田屋は、いつの間にかこんな南蛮風になったのじゃ」

土方「エゲレスじゃ。エゲレスにかぶれとるんじゃ。くそっ」

沖田「おい土方。土方。扉が開かぬ」

土方「なんじゃと」

とドアを引き戸のようにして開かない。

土方「閉じ込められた。くそ。はかられたか！なんじゃこの

部屋は」

沖田「触るな！ 畏かもしれんぞ」

土方「卑怯者！ 出てこい。姿を見せろ」

二人「……」

土方「誰もおらんのか」

沖田「そんな馬鹿な。あれだけおったではないか」

土方「あるいは逃げられたか」

沖田「くそっ」

土方、そっといろんな物に触ってみる。

沖田「おい。よせ」

土方「いやはや。なかなか面白い作りの部屋じゃ」

沖田「おい。やめろと言っておろうが。土方！」

土方、そつといろんなものに触ってみる。

土方「おほ。これは、なかなか。おほ！ おもしろい」

沖田「やめる」

土方、ベッドに乗る。飛び跳ねる。

土方「あはは。これは！ 愉快じゃ。沖田、貴様も来い。これは愉快じゃ！」

沖田「やめんか！ 貴様それでも副局長か」

土方「……」

とやめて、刀を仕舞う。

土方「沖田よ」

沖田「なんじゃ」

土方「このまま幕府がなくなったらどうする」

沖田「貴様。めったなことを言うな。立場をわきまえろ」

土方「いや、貴様にしか言わんこんなことは。どうする」

沖田「幕府はなくならん」

土方「もし。もしもの話だよ」

沖田「なくならん。げほげほ（咳）」

土方「大丈夫か？」

と背中をさする。

沖田「ただの結核だ」

土方「そうか。なに！ え、結核ってなに？」

沖田「大丈夫じゃ。かたじけない」

土方「沖田は、坂本龍馬という男を知っとるか」

沖田「ああ。いけ好かない野郎だ。いつかこの手で」

土方「あれはなかなか面白い人物じゃ。いや、考え方はなつとらんが、やっとなることは面白い。あやつは億型と祝言を挙げた後に、旅に出たそうだな」

沖田「旅？ 何の為に」

土方「西洋ではそれを蜜月というらしい。まあ言うなれば新婚旅行ってところかのう」

沖田「下らん。女たらしめ」

土方「女たらしは貴様もだろうが」

沖田「それがしは！ 女どもが勝手に寄って来るだけじゃ」

土方「どこがよいのかこんなひよろっこいの」

沖田「触るな」

土方「ワシはのう、この戦が全部終わったら、龍馬にならって旅がしてみたいんじゃ」

沖田「何を陽気な。そういうことは勤王のバカどもを片付けてから言え」

土方「ワシはな、この広い日本を回ってみたいんじゃ。貴様と」

沖田「!? それは……どういう意味じゃ」

土方「……あ？ あ、バカ者。違う。貴様と蜜月などしとうないわ。ただその……まあ、ワシは、貴様と旅がしてみたいなあと思っただけじゃ」

沖田「それがしは思わん」

土方「いや行こうよ。行こうよ旅。ねえ総ちゃん、旅しよう？ ね？」

沖田「なんだ急になれなれしい！」

土方「すまん。つい」

沖田「しかし困ったな。このまま閉じ込められたままでは埒が  
あかぬ。おーい、おーい！ 誰かおらぬか。おーい！」  
と外へ言う。

土方「総二はさ、あれなの？ 思いを寄せるオナゴとか、おるのか」

沖田「なにいい!? 貴様この状況で……」

土方「あいや。別に。いるならいるでいいんだ。ワシはそうい

うの、気にせんから」

沖田「貴様何を言っておるのか自分で分かっておるのか」

土方「すねて」分かってるよ……。分かってるけどさあ……」

沖田「土方？ 貴様大丈夫か？」

土方「なんかもうよく分からん。ワシは、このまま死んでいくのじゃ。貴様も、このまま死んでいくのじゃ。思想や主義のために命を懸けるのは分かる。大事じゃ。それは分かるんじやが、ちよつとくらいさ、自分のために人生を使つても良かるうもん？」

沖田「よくもそんな……。近藤局長が聞いたら何とというか。貴様、腹を切れ」

土方「え、なんで」

沖田「仲間がこの壁の向こうで命がけで戦っておるときに……。なんかもう許せん。今ここで腹を切れ」

土方「ええ？ 分かった……。切るよ。切ったら、何してくれる？」

沖田「どうした？ 本当にどうした？ ああ、頭を打ったのか。その階段、貴様落ちたものなあ。よし、横になれ。」

早く」

土方「うん。一緒に横になる」

沖田「腹を切れえ！ 今すぐ腹を切れえ！」

土方「冷たいなくもお」

沖田「自害できぬなら、それがしが斬る」  
と刀に手を掛ける。

土方「ずるい！ ずるいよ総司（そうじ）。貴様に剣で勝てるわけなからう？」

沖田「抜け。貴様の根性、たたき直してやる」

土方「じゃーあ、ワシが勝ったら、何してくれる？」

沖田「何もせん」

土方「(低く)それは、抵抗せぬ、という意味じゃな？」

沖田「なに？」

土方「何をしてもよいというのだな、貴様に」

と抜刀。

沖田「なっ。違う、やめろ、な？」

土方「……きええ！」

とかかる。沖田、抜刀して受ける。

沖田「ぐっ……。なんだその馬鹿力は。すさまじい殺気！で

あー！」

と返す。

× × ×

殺陣。

土方「総司。総司！」

沖田「来るな。来るなあ！」

途中で、ピザ屋来る。

ピザ屋「♪大きい！ 美味しい！ すごく早い！ ローマ、ロ

ーマ、ローマピザ！」 キャー！」

と出て行く。

土方「開かぬ。開かぬぞ」

とかいろいろあつて……。

二人、くたくたに。

× × ×

沖田「貴様が……こんなに強かったとは」

土方「くそう、勝てぬ。全く勝てぬ……」

と刀を仕舞う。

土方「もうよいわ。好きにしろ。首でも何でもはねやがれ」

沖田「土方……。貴様のような剣客を殺せるわけなからう。貴

様はそれがしの大事な仲間じゃ」

土方「え。なに。手加減したってこと？」

沖田「いや、全力じゃ」

土方「そうか。そんなに嫌だったか」

沖田「そういう意味では……ござらん」

土方「もうよい。もうよい！　ワシの命、貴様との今の闘いで  
失ったものとさせていただく」

沖田「あん？」

土方「正直に言おう。ワシは、沖田、貴様が好きじゃ」

沖田「!?!」

土方「貴様を、好いとう。なんでか分からんが、ワシは、いつの間にか貴様のことになって気になって仕方がなくなつたんじゃ。許せ。どうか、この通りじゃ。……おかしな話じゃのお。男が男を好きになるなんて。いや、男色はよくある話だが、こんなに恋焦がれるほどになるとは夢にも思わなかった。それでつい。お恥ずかしい限りじゃ。許せ、この通りじゃ」

と土方下座。

沖田「やめろ土方。謝るのはそれがしの方じゃ。それは、それ

がしがすべて悪いんじゃ」

土方「なぜじゃ。なぜ沖田が悪い」

沖田「いや……」

土方「ワシじゃろ？　ワシが悪いんじゃ」

沖田「それがしじゃ。それがしが悪いんじゃ」

土方「ワシが悪いんじゃ」

沖田「それがしが悪いんじゃ」

土方「ワシが悪いんじゃ」

沖田「それがしが悪いんじゃ」

土方「ワシが悪いんじや」

沖田「それがしは女なんじや」

土方「!？」

沖田「それがしは、どうしても新選組に入りたくて……女であることを隠して入隊した。そして、これまで隠し通してきた。じゃから、貴様の、その、なんていうか、気持ちは、間違っておらんというか……」

土方「ちようど良いではないか！」

沖田「!？」

土方「なんだ。なんだよ。ワシは本当にどうしようか、困っておったんじや。この、なんていうか、ムラムラする気持ち？ これをどこに向けて良いのかわからんでな。男色の春画などを見てみたんだが一向に息子が反応せぬ。もうそれで、どうしてよいのか本当に悩んでおったのじや。しかしよかった。実に良かった。これで万事解決じや」

沖田「解決？」

土方「沖田。ワシの妻になれ」

沖田「ならぬ!」

土方「よいではないか。ワシとともに国中を旅しようではないか」

沖田「……。せぬ。せぬぞ。そんなことは断じてせぬ。それがしは男じや。男として生きていくと決めたのじや。だから」

土方「ようするに、女としてなら、旅をしても構わないというところじやな?」

沖田「!……違う。断じてそういうことでは……ない」

土方「堅苦しいことを言うな。一步外に出ればいくさ場じや。

しかし、今は静かに二人きり。よいではないか、どうせ短い人生じゃ。ほんのひとときくらい、好きにやっても」

と抱きしめる。

沖田「あっ」

と女らしい声が漏れる。

土方「そ、う、じ」

沖田「歳三。よいのか。本当によいのかこんなことで。この池

田屋襲撃は、歴史に残る事件だぞ。そこに俺たちがいないとなると、人は怪しむ」

土方「歴史は、夜作られるんじゃない」

沖田「は？」

土方「御免」

と押し倒す。

暗転。

宏治 原稿を書いていた。

宏治「……でーけた。あーあ、でけてもうた。……なあ。なあ。聞いている?」

とiPadをクリック。

宏治「でけたわ、原稿。またしよもないもん書いてもた。編集のボケの言う通り書いたったわ。ほんましようもないわ。なんやこれ。これが世に出ると思うと何かもう……。こういうのが売れるんやって。いや、編集担当が変わってな、若い奴になったんや。新藤さんは副編集長になったわ。あの人。えらなったんよ。若いのはあかん。売り上げのことばかりや。金金金や。まあ、今時本なんか売れへんからな。しゃあないねんけど。しかしあれやな。年取るとな、やりたいことと、やれることが、一致せんようになるな。おもしろいもん書きたい言うても、全然アイデア思いつかへんし。食うためには結局編集の言うこと聞くしかない。俺にはもうこれ(ペン)しかないのに、何書いてても楽しくない。なんかもう、どうでもようなってきた。……。うん、疲れた。……。しんどい。お前に……。会いにいらこうと思っけんねん」

鞆からロープを出す。首吊り用にすでに結んである。それを持って天井を見上げる。

宏治「ないやん……全然引つ掛からへん。……。飛び降りるか」と窓を見る。

宏治「こ二階やわ。よし。じゃあもうあれしかないな。見とけよ? 壮絶にいったるからな」

と包丁を出し、あぐらをかく。何度かやって、た  
めらう。

宏 治「……三島先生。あんたはすごい。こら無理や」

と仕舞い、

宏 治「♪れんたん、れんたん♪」

と今度は鞆から練炭を出す。

宏 治「……七輪忘れた」

灰皿に練炭を置くが、大きさが……。

宏 治「……」

包丁とロープを比べて……。ロープを選ぶ。結ぶ

場所は……。ドアだ。ドアノブに結ぼうとする。

宏 治「こうやって死んだヤツおるって新聞に書いてあったで。

待つとりや、いますぐそっちいくからな」

床に座って、首にロープをかけて、体重を掛ける

と、チャイム、ピンポーン

宏 治「ふん！」

と首を絞めている。

ピンポーン。ピンポンピンポンピンポンピンポン。

ドアノブが回される。ガチャガチャ。ドアが開く。

宏 治「うおお……」

と前にのめる。ピザ屋の愛ちゃん、入ってくる。

愛 「うああ！ 何やってんですか！」

宏 治「げほげほ」

愛 「大丈夫ですか！ 大丈夫ですか！」

宏 治「なんや君」

愛 「ピザ屋です」

宏 治「邪魔すんなや」

愛 「すみません。でもこれ」

宏 治「頼んでへんわ」

愛 「うそ……だってこの階（こ）が端（こ）ですよ。二階の端から端まで来たのに。じゃさっきのコスプレしてた人たちなのかなあ」

宏 治「しらんがな。はよいねもう」

愛 「じゃこれ、三階かもしれないってことですよね。ここ五階まであんだけど。ってかもう30分過ぎてるし、ああもう！」

宏 治「はい。じゃ頑張って」

愛 「やめた。もうやーめた。もういい。ほんとムカつくあの店」

と座り込む。

宏 治「おい」

愛 「食べます？ お腹空いちやって」と開ける。

宏 治「いや」

愛 「うわ、べちゃべちゃじゃん！ なにこれ……雨入っちゃったみたい。最悪」

宏 治「てか出て行ってくれへんか」

愛 「この雨の中また原付乗るの？ ぜってえやだ」

宏 治「おいおい。見てわからんか？ 今からな、死ぬねん。せやから、君、邪魔。ね？」

iPadを見て、

愛 「この人綺麗……。なんて人？」

宏 治「いや知らんやろ」

愛 「え、芸能人じゃないの？」

宏 治「違う」

愛 「じゃ彼女？ 愛人？」

宏 治「亡妻」

愛 「ぼうさい？」

宏 治「亡き妻」

愛 「!……すいません」

宏 治「大丈夫」

愛 「綺麗な人ですねえ。へえ……こんな綺麗な人が……（宏

治を見て）（見比べて）……こんな綺麗なのに。綺麗な  
のになあ」

宏 治「なんやねん！」

愛 「……なんか、いいなあって思っ」

宏 治「なにが」

愛 「会いに行くんでしょ？奥さんに」

宏 治「……」

愛 「どうぞ」

宏 治「？」

愛 「どうぞ。こんな綺麗な奥さんだもの。そりゃ会いたいよ。  
気持ちちは分かります。私もね……彼氏に捨てられちゃ  
って。かっこよかったのになあ」

宏 治「あそう」

愛 「バンドのボーカル。私ドラマ。あいつファンに手出して、  
そのまま惚れやがって。んで、なぜか私がバンドクビ、  
みたいな。意味わかんねえ。なんかね、全部失っちゃ  
ったんですよ。社会的な所属する場所っていうんです  
か。バンドとか事務所とか二人暮らしとかバイト先と  
か仲間グループとか？ そういうのが全部なくなると、  
人って死にたくなりますよね」

宏 治「それは……そうかもな」

愛 「死にましょっか、一緒に」



宏 治「色が白うてな、足はすつと細くてな、腰がきゅつて締ま  
ってて、胸はそないにないねんけど、ケツがまたな、  
ぷりつとしててやなあ。あん時の声とか息遣いとか、  
もう何もかもが完璧やねん」

愛 「いくタイミングとか？」

宏 治「そう！」

愛 「大事よね、それ」

宏 治「せやねん。大事やねん。それが大事やって分かったんは、  
あいつが死んでからやけどな。そら寂しいからさ、い  
ろいろ他でやったりしたわけ。商売の方とか、行きず  
りのなんとか。でもな、全然ちやうねん。もうな、全  
然楽しないねん。それで分かったんや。あいつがいかに  
完璧な相手やったかっちゅうことがな」

愛 「ふうん。私そこまでの人いないなあ。羨ましい。お子さ  
んは？」

宏 治「おらん。出来る前に死んだ」

愛 「そうか……」

宏 治「結婚する前はそれなりに色々な女性と付き合ってきたけ  
どな、あんな合う女はおらん。てかあんなに合う女が  
この世に存在することに俺はめちゃくちゃ驚いた。今  
までの女はなんやったんやって」

愛 「エロいよオッサン」

宏 治「ええやないか妻の話や。結婚ってのは元々は、女性の肉  
体の、独占契約やったんや。それが始まりや」

愛 「独占契約？ほんとに？ あ、だから結婚したら他の人  
とセクロスできないのか」

宏 治「セクロスして、また古い言い方するなあネエちゃん。セッ  
クスの2ちゃん用語やろ。もう流行らんで」

愛 「直接言うのは恥ずかしいじゃん」

宏 治 「おぼ」

愛 「おぼこってなに」

宏 治 「うぶってことや。おぼこいうちはな、死んだらあかん」

愛 「そっちは死のうとしてたくせに？」

宏 治 「こっちは薄汚れた人生や。生きてても死んでも誰にも迷惑かけへん。小説家なんてな、死んだってだーれも困らへん。世の中なんにも変わらへん」

愛 「確かに」

宏 治 「やっぱそう思う？」

愛 「や、でもさ、ここで死んだらこの人に迷惑掛かるよ」

宏 治 「それは…：そうやな。なんか自然に死なれへんかなあ、アイツみたいに」

愛 「奥さん？」

宏 治 「病気や。あっちゅう間やったわ。ほんま。ほんま…：

(泣けてくる) アホが。ほんまアホやで」

愛 「……」

宏 治 「部屋で仕事してるときなんかはな、横で掃除されたり料理の音がうるさかったりして、邪魔やなああって思うこともあつたけどな、今思ったら、そんな時間も愛おしいな。その時間を有効に使って、セックスしたかった」

愛 「そっち？」

宏 治 「いろんなとこ連れて行ってやりたかった。色んなとこ連れて行って、行く先々でしたかった！」

愛 「やば」

宏 治 「服もようけ買うてやりたかった。それを脱がせたかった！」

愛 「性欲やば！」

宏 治「君は分かってない。ええか、女つちゅうのは、生理が来て、毎月来て、妊娠して、痛い思いして子供産んで、そりゃ大変や。ホンマに大変や。せやからな、女には更年期というプレゼントが用意されてるんや」

愛 「はあ？ プレゼント？」

宏 治「でも男はな、一生性欲があんねん。一生、この性欲と付き合っついていかなあかんねん。幼稚園とか小学校から始まって、中学、高校とクラスの女とかアイドルとか見て悶々として、大学生になってやつとセックスして、大人になってちよつとモテるようになったら、結婚や。結婚して、やつとやりまくりや、思てたら子供や。子供できたら終わりや。奥さんからも世間の女からも相手されん。で、そのままジジイになっておしまい。それでも、性欲だけは残ってる。死ぬまでやぞ。よぼよぼのジジイになって、女抱かれへんのに、性欲はあるんや。こんな残酷なことあるか！」

愛 「力説したねえ」

宏 治「そうや。力説や。これが力説せんとおられるかちゅうねん」

愛 「大変だね。風俗行けば？」

宏 治「だから。風俗はあかんねんて。男がな、性欲処理したからって心までスッキリすると思ったら大間違いやで。愛がないと。アイツでないと」

愛 「私は？」

宏 治「なにが」

愛 「私だと、心までスッキリする？」

宏 治「……」

愛、ベッドに座り、足を開く。

愛 「私は、愛がなくてもいい」

宏 治「……」

愛 「……」

宏 治、愛に覆い被さったりするも……、やめて、

宏 治「……君が悪いんじゃないねん。めっちゃムラムラしてんねん。それはほんまや。でもな、やった後にめっちゃ後悔すんねん。あーあ、やっぱりアイツとは違うわって。こんなんするんじゃないかったって。もう、何回もそうなってん。せやから……ごめんな」

愛、泣いている。

宏 治「……すまん」

愛 「それってさ、賢者タイムってヤツでしょ。終わったあとに我に返っちゃうやつ。そこで気持ちちが冷めちゃう」

宏 治「まあそうかもな。それもまあ、理想の女を知ってしまうた男のサガや」

愛 「サガ？」

宏 治「サガは性欲のセイと書く」

愛 「作家っばい！」

宏 治「おおきに」

愛 「こちらこそ、なんかお邪魔しちゃった」

宏 治「お。そうか。お茶も出さんですまんの」

愛 「いえいえ。オジサン、死なないでね」

宏 治「いや、俺は死ぬ気満々や。こんなムラムラした状態で一生過こすなんていやや」

愛 「そんなになの？」

宏 治「まだ分からんか。せやから、天国に行つてアイツとやりまくるんや」

愛 「……」

愛、宏治にキスをする。それは感謝のキスだ。

愛 「……奥さんに謝っというて」

宏治 「これぐらいは大丈夫や」

愛 「じゃあ、宜しくお伝え下さい」

宏治 「おう。とりあえず何か自然に死ねる方法考えるわ」

愛 「空から隕石振ってくるのかな」

宏治 「地面が突然割れるとかな」

落雷。

二人 「(これだ!)」

宏治 「ここ屋上上がれるんちゃうかったけ!」

愛 「上がれる」

宏治 「よっしゃ!」

愛 「愛!」

宏治 「え。愛がどうした」

愛 「私の名前。憶えというて」

宏治 「愛」

愛 「さようなら」

宏治 「来世で」

愛 「来世で」

と出て行く。

宏治、荷物をまとめる。

宏治 「雷。雷。待つとれよお前。今行くからな」

バーン! と銃声。壁に穴。

宏治、倒れていく。

× × ×

菜々子の声 「……本物」

章太郎の声 「偽物だと思ってたの? 篠崎さんあれ偽物だと思っ

てたの? 一目でわかるじゃん。どう見てもグロック

17じゃん。見りゃ分かるだろ！」

菜々子の声「分かるわけないでしょ！」

× × ×

宏治、ベッドの上で、pppを抱いて死んだ。

暗転。

■〈排卵期、無精子症〉 505号室

響生、繭、リュウヘイ、ヤヨイ、部屋飲みしている。みなカジュアルな格好。

リュウ「セーラー服はやばいだろ」

響生「なんでだよ」

ヤヨイ「全然やばくないよ、男の人は好きでしょ」

リュウ「そうかあ？ ロリコンじゃん」

繭「うわー、ろりこーん」

響生「いやいや、制服ってのは男のロマンだろ」

ヤヨイ「分かる分かる」

リュウ「なんでお前が分かるんだよ」

響生「じゃお前はどのようながいいんだよ」

リュウ「俺？ 俺は……なんだろ」

ヤヨイ「コスプレでしょ。アニメの」

リュウ「いや？」

ヤヨイ「え！？……だって休みの日アニメばっか見てるじゃん」

リュウ「俺別にコスプレとか興味ないし。二次元は二次元に留ま

っていてほしいっていうか」

ヤヨイ「マジか……」

と響生と繭と顔を合わす。

響生「そうだなあ。俺ほら、会社行ったことないから、やっぱ

OL風、とか？」

三人「OL風……？」

と真面目に悩む。

繭「それは丸の内系ですか。新宿系ですか。品川系ですか。

六本木系ですか」

リュウ「そんなにくつもあるの？」

繭 「分かんないけど、何か使えるものないかなって」

響 生 「おけ。じゃそれやめよう。他には？」

リュウ 「他？」

繭 「看護婦は？」

リュウ 「それは毎日見てるから。興奮しないよな」

繭 「外した……！」

と響生を見合う。

リュウ 「ほら。こいつも看護師だし」

とヤヨイ。

ヤヨイ 「でもほら。私たちの制服ってパンツだし、ウエストとか

ラインも強調されてないけどさ、ドンキとかで売って

るようなヤツだと興奮しない？ 逆に。逆の逆で」

リュウ 「しない」

ヤヨイ 「もつとちゃんと想像して。ほら、たとえば繭ちゃんがそ

ういうなんか風俗嬢みたいな看護婦の格好してたらど

うよ」

繭 「どうすか？」

リュウ 「笑」 そりゃ、まあ。だって繭ちゃん、若いし」

ヤヨイ 「かわいいしね」

リュウ 「照」 あ、まあ、かわいいよね」

響 生 「カワイイいただきました。スタンバイ！」

繭 「靴いじりながら）でもヤヨイさんだって素敵じゃない

ですか。しっかりしてるし、明るいし。お医者さんと

看護婦さんなんて最高ですよ」

ヤヨイ 「元ね、元看護婦」

リュウ 「看護師」

響 生 「年上女房つてのもいいよな」

繭 「あ、年上なんだあ」

ヤヨイ「一個ね」

響生「一つ年上の女房は金の下駄を履いて探せってな。そんな  
いいもんなの？」

リュウ「まあ」

繭「えー。仲いいんだ」

ヤヨイ「大丈夫！ 仲いいけど、仲良くないから」

リュウ「は？」

響生「でもさあ。たまには年下とか、行きたくならない？」

リュウ「何言ってるんだお前。お前と一緒にするな。こいつさ、高  
校ん時からナンパばっかしてんの。サッカーしてナン  
パ、ナンパしてサッカー」

繭「そうなのよねえ。女好きなのよねえ。そのわりに……ね」

響生「てへへろ」

繭「きつも」

リュウ「なに？ そのわりになんだよ」

繭「私……なんだか汗かいてきちゃった」

リュウ「暑い？ クーラー強める？」

繭「あ、いいですいいです。シャワー浴びよっかな」

響生「いいんじゃない」

繭「いいですか？ じゃすいません」

と荷物を持ってシャワー室へ消える。

リュウ「いいよなあ響生は。あんな若い奥さんもらってさー」

響生「だろ」

ヤヨイ「わたしと十個くらいしか変わらないでしょ」

リュウ「すっごい離れてる」

響生「いいぞお。肌の吸い付きが違う。太股撫でるだろ？ 手

がな、くっ、て吸い付くんのだ」

リュウ「手つきいやらしいよ」

響生「すごいマジで。あれが若さってヤツだな」

ヤヨイ「すいません吸い付かなくて」

響生「あいえそういうことではないです」

リュウ「結婚したの去年だっけ」

響生「一昨年だよ」

リュウ「え、もうそんな経つ！？ 早えー。お前らの結婚式楽しかったなあ」

響生「俺も楽しかった。お前の結婚式はつまんなかったけどな」

リュウ「しょうがないだろ、関係者どっちも病院内だぜ？ そり

ゃ、固くもなるって」

響生「チンコが？」

リュウ「違うよ？ もうこいつ最低だろ？ 昔からこうなんだよ。

会社でもそんななのかお前」

響生「おう。OLにはバカ受け」

リュウ「付き合いで笑ってるだけだろ」

ヤヨイ「私こういうノリ好きー」

リュウ「ええ？ マジで？ 品性疑うなあ」

ヤヨイ「もうほんとこの人お坊ちゃんだからさあ、こういうとこ

面倒なのよねえ。笑いの壺がずれてるっつうか。落語

とか爆笑するんだよ？」

リュウ「いや、落語は面白いから」

ヤヨイ「いや寝るからー！」

リュウ「寝ない。聞けよ」

響生「落語の話はどうでもいい。ちょっと俺の話聞いてくれな  
いか」

と真顔に。

リュウ「え。なに。なにになに」

響生「いや……」

リュウ「悩んでんの？」

ヤヨイ「出てましようか？」

響生「いや大丈夫」

リュウ「何だよ。どうした」

響生「リュウヘイ」

リュウ「ん」

響生「高校からの大親友と思って一生のお願いがある」

リュウ「あちゃあ……」

響生「え」

リュウ「いくらだ。いくらあればいいんだ」

響生「金の相談じゃない」

リュウ「違う？ え、違うの！？ え、じゃ、なに。はっ！……」

おんな！

響生「いや、まあ、おんなの話っちゃあ女の話だけけど」

リュウ「マジかよ、なんでだよ、あんなカワイイ奥さんもらっと

いてー！

響生「いや。そうなんだけど、これだけはどうしようもなくって」

リュウ「ほんとお前どうしようもねえな。いやマジそういうのあ

り得ないから。俺ら結婚して五年経つけど、ないよ？

ないない」

響生「そんな、話聞く前にないとか言うなよ。最後まで聞いて

くれよ」

リュウ「聞く必要ねえわ。不愉快だ」

響生「そんな言い方しなくてもいいだろ！」

リュウ「なんでお前がキレルんだよ！ お前ほんとバカ」

響生「どうせ俺は昔からバカですよ」

リュウ「どこの誰だ。どんな女なんだよ」

響生「何の話だよ」

リュウ「女だよ。誰だっつうの」

響生「誰が？」

リュウ「誰がじゃねえよ。おめえの相手だよ」

響生「俺の相手？ 俺の相手はこの場合……」

リュウ「なにこによこに言っただよ。じゃあハッキリ言っ

やるよ。おめえのセックスの相手は誰なんだ」

響生「……」

とヤヨイを指す。

リュウ「!？」

ヤヨイ「……」

リュウ「……それ、マジで？」

響生「この場合は」

リュウ「この場合？」

響生「この場合」

リュウ「てめえ！」

と殴りかかろうとするも弱い。

響生「ちよちよちよ！悪かった悪かった悪かった。もう言わな

い。そういう事言わないから。これはなかったことに

してくれ」

リュウ「できるかそんなこと」

響生「なんでだよ。忘れろよ」

リュウ「忘れられるかよー！」

響生「忘れてくれよ。頼むよ。恥ずかしいじゃねえかよ」

リュウ「人の妻抱いといて恥ずかしいもなんもねえだろ」

響生「抱いてねえわ。何の話だお前」

リュウ「不倫だろうが。てめえ俺の、ヤヨイと不倫してんだらう

が」

響生「はあ！？　してねえよ。ちげえよ。バカ。ほんとバカ。

お前は昔から早トチラーだな」

リュウ「なんだ早トチラーって」

響生「あのな。俺が言いたかったのは。つまり、その……」

リュウ「なんだよ」

響生「言えよ。お前今、俺との付き合いがここで終わるかこれからもかろうじて続いていくかの瀬戸際に立ってるんだぞ。あのサッカー部時代から続いた俺たちの友情の」

響生「おめえ写真部だろうが」

リュウ「サッカー部の写真を撮ってたじゃん！」

響生「……あのな。俺な、変態なんだよ」

リュウ「知ってる。それは重々知ってる」

響生「だからな、こんなことを頼めるヤツがおめえしかいねえんだよ」

リュウ「頼み？　なんだ」

響生「……スワッピングがしたいです」

リュウ「！……。……あ、だから、相手だれって聞いたときに、こいつを指したんだな」

響生「この場合はな」

リュウ「なるほどね」

響生「そうですね」

リュウ「断る」

ヤヨイ「賛成」

リュウ「なんで！」

ヤヨイ「や、ま、ちょっと興味あるかなって。ちょっとだけね」  
リュウ「お前……スワッピングの意味分かってるのか？」

ヤヨイ「夫婦交換。私と繭ちゃんが、入れ替わってえ、お互い

い、違う旦那さんとお」

リュウ「考えただけで目眩がする」

響生「頼む！一回だけ。一回だけでいいんだ」

リュウ「お前もしかしてこいつに惚れたのか」

響生「いやそういうんじゃないんだ。俺はただ、スワッピングがしたいんだ。その行為全体に興奮するんだ」

リュウ「変態じゃねえかよ」

響生「そう言ってるじゃねえかよ！俺は変態だよ。それは認める。だから頼む！今夜だけでいいから。今夜だけ！」

リュウ「今夜だけってさ、もしかしてさ、初めからそのつもりで俺らを誘った？」

響生「あ、や、なんつうか」

リュウ「ヤヨイ、帰ろう」

ヤヨイ「えー？ちょっと興味あるのにー」

リュウ「冗談はヨシ子ちゃんだ」

ヤヨイ「!？」

リュウ「帰るぞ。(響生に)しばらく連絡してくんな」

響生「ちょっと待って待って！今お前ら帰ったら俺、繭になんて言えはいいんだよ」

リュウ「ありのままを言え」

響生「言えるわけないだろこんな、俺がスワッピングがしたくて今日はホテルに四人で来たけど怒って帰っちゃいましたなんて。俺、ただの変態じゃん。あいつには変態って思われたくないんだよ。絶対に言えないよ俺のこんな趣味」

繭「いやあ、さっぱりしましたあ」

とエロいナース服で出てくる。

リュウ「完全にやる気じゃん！ 伝わってんじゃん、お前の趣味！」

繭 「あ、話したの？ えらいねえ、ひーひー」と撫でる。

リュウ「ひーひー!？」

響 生「リュウヘイがさ、ダメだつてさ」

繭 「え……。そんな……」

リュウ「なんだよ、俺にコスプレがどうか聞いたのはそういうことかよ。夫婦で示し合わせて、なんだよ」

繭 「私、魅力ないですか」

リュウ「そういうことじゃないんだけどさ……」

繭 「じゃ何ですか」

リュウ「なんですか。常識ってもんがあるでしょ？ 常識的に考えてさ、こーいうのは」

ヤヨイ「かぶして。私は構わないと思う」

リュウ「だろ？ なに!？」

ヤヨイ「やっぱだいたい興味ある」

響 生「でしょ奥さん!」

繭 「ね、奥さん!」

リュウ「お前ら……。ヤヨイも!」

響 生「分かった。恥ずかしいんだ。電気消そう」

リュウ「そういうことじゃねえから」

響 生「じゃ俺ら違う部屋借りるから」

とヤヨイを連れ出そうと。

ヤヨイ「はい」

リュウ「なにやっつてんだよ。はい、じゃねえだろ。おい」

ヤヨイ「だつて」

リュウ「だつても何もあるかよ」

ヤヨイ「あるわよ。最近……ないしき。今年何回した？」

リュウ「お前そういう話……ですんなよ」

ヤヨイ「付き合ってた頃はいっぱいあったのにさ。病院とかでもやってたんだよ？」

響生「いいねえ！」

繭「やばみー」

ヤヨイ「それが結婚した途端にしゅーん、だもんさ」

繭「だもんさ」

リュウ「それはお前が……」

ヤヨイ「私のせい？」

リュウ「違う。……違うって。あのな、哺乳類のオスってのは常に同じ相手と交尾するより、取っ替え引っ替え相手のメスを変えた方が交尾の回数は格段に増えるんだ。だからしょうがねえんだよ。結婚すりゃ回数は減るよ。それはもうアプリアリに決まってるんだ」

ヤヨイ「また訳の分からない難しい言葉とか、論理とか。そういうのですぐ誤魔化そうとするんだから」

リュウ「論理じゃない。摂理だ。自然の摂理。お前（響生）、こいつ（ヤヨイ）とやりたかったただけだろ。昔から熟女好きだもんさ」

響生「熟女って言うにはちよっと若いんだよな」

ヤヨイ「褒められてるのかけなされてるのか」

響生「それに別にヤヨイさんはタイプじゃない」

ヤヨイ「は？」

響生「あ、じゃ、こういうのはどうだ。俺が、他の部屋に行ってるから、君ら、三人で……楽しむってのは」

リュウ「覗くのか」

響生「ん？」

リュウ「その窓から、俺ら三人が絡んでるのを覗くんだろ。スワッピングが好きな奴って2種類いるじゃん。自分が参加して大勢でセックスすることに興奮するタイプと、自分の恋人や妻が大勢にやられてるのを見て興奮するタイプと」

響生「お前詳しいな！」

リュウ「医者ってな、変態が多いんだよ。裏じゃそんな話ばかりだ」

響生「そのわりにお前はどストレートだな」

繭「そうしましょ」

リュウ「なんだよそのノリ……」

繭「早くしないと」

リュウ「？」

響生「繭も。見てるだけでいいんだ。お前と、ヤヨイさんがここで絡んでもらって、挿入して、んで、射精だけ、繭の中にしてくれれば」

リュウ「はあ!？」

響生「繭、すっげえ気持ちいいぞ、中」

リュウ「お前!頭大丈夫か？」

繭「私、よく気持ちいいって言われます」

リュウ「……………」

響生「よし。じゃあ決まり! やろう。そうしよう。ね。暗転!」

暗転しかけるが、

リュウ「ちよつと待てえ! 分かったよ。お前、二人ともが変態なのはよく分かった。それは、俺としては全然構わない。他人の趣味にとやかく言うつもりはない。それに、絶対に他言もしない。俺は医者だ。プライバシーに関

しては口は硬い。だから、今日は帰らせてくれ。……  
楽しかったよ。楽しかったか？ とにかく、じゃ。ヤ  
ヨイ、行くぞ」

ヤヨイ「……やだ」

リュウ「なんで！」

ヤヨイ「……なんでも」

リュウ「なんなんだよこれ。なんだこれ。マジ意味分かんねえ。

二度と連絡してくんな。行くぞ！」

と出て行くこうと。

響生「……悪かった。ごめん。ほんとにごめん。全然違うんだ。

本当は。全部ウソなんだ。ウソなんだよ。リュウへ

イ！……本当のことを言うから」

リュウ「レイプが好きなのか？ S Mが好きか？ 分かった死体

好きだ。こいつ殺して二人で犯そうぜ、みたいな。そ

れともゲイか？ 狙いは俺か？ なんてな」

と嘲笑。

ヤヨイ「違うわよ。響生さんそういう人じゃない」

繭「そうです、これ以上私の夫をド変態扱いするのはやめて

下さい」

リュウ「すみません」

繭「普通なんです。この人は、普通の変態なんです」

響生「違う。今もう変態の話はいいんだ。正直に言うターンだ」

繭「分かった。正直ターンね」

響生「俺は……、無精子症だ」

リュウ「？」

響生「結婚して二年。毎日毎日やりまくった。俺はもう目を瞑

ってでもこいつのホクロの位置を正確に突ける。それ

くらい毎日励んだ。なのにどうも子供ができない。毎

月毎月生理がきやがんだ。それでな、まあしようがねえなと思って二人で病院に行ったんだよ。こいつどっか悪いかもなって。悪かったら治してあげたいなって。そしたらさ、俺、なんかこんな狭い部屋に放り込まれてさ、なんかエロ本とか渡されてさ、今時エロ本だぜ？ しかもなんかアニメ系の。それでさ、こんな瓶渡されてさ、ここに精子入れて下さいとか言われてさ。はい？ みたいな。それでしようがねえからエロ本見ただけけどこれがまあ勃たねえわな？ で、目つむつて、こいつが裸で、エプロンとかして、それで、俺が帰ってきたら、ネクタイ外してくれて、そのまま、こう、下におりてきて、口ではくっつけて、おいしいか？って聞いたたら、うん、おいひいて……」

リュウ「お前の妄想はいいから！」

響 生「要するに、検査したら、精子が、なかった。不妊だったんだよ俺たち。しかも、原因は、俺」

リュウ「……で？」

響 生「その話をさ、この前俺たち四人でバーベキュー行ったじゃん、その時にこいつ（繭）がヤヨイちゃんに相談したんだってさ。ヤヨイちゃん看護婦さんだから。俺らほら、川で泳いでたじゃん？あの時」

リュウ「ああ」

響 生「それで、その……」

繭 「聞いちゃったんです私。ヤヨイさんのこと。ごめんなさい」

リュウ「？」

繭 「ヤヨイさんが、その……（説明を続けようとして）」

ヤヨイ「不妊の話よ。私の不妊の話をね、彼女にしたの。私もず

つと治療してるよって。でも全然子供出来ないうてね。  
もう二年やったからさ、今年に入ってこの人も諦めち  
やって」

リュウ「そんな話するなよ」

ヤヨイ「するわよ、女同士だもの」

響生「俺たち、子供が欲しいんだ。どうしても欲しい。だから。

こいつと、セックスしてくれ」

リュウ「……………」

繭「お願いします！」

リュウ「……………」

ヤヨイ「そういうこと」

リュウ「え!?!」

響生「こんなこと頼めるの、お前しかないんだよ。だから…

…」

リュウ「ちよちよちよと待て。俺がもし、繭ちゃんと、して」

響生「してくれるのか!」

リュウ「仮に、したとして、子供ができたとして。お前は、それ

でいいのか?」

響生「いいよ。全然いい!」

リュウ「それは一体、誰の子だ」

響生「法律上は、俺たちの子だ。民法に書いてあるんだよな?」

繭『第772条。妻が婚姻中に懐胎（かいたい）した子は、

夫の子と推定する』

リュウ「そうなの!?!」

ヤヨイ「そうよ」

リュウ「じゃ、不倫の子でも、夫の子になっちゃうわけ?」

ヤヨイ「夫が何も気付かなければね」

響生「だから大丈夫」

リュウ「なにが大丈夫なんだよ。てかなんでお前も賛同してんだよこのプロジェクトに！」

ヤヨイ「だって。うち不妊治療にいくら使ったと思ってるのよ。七百七十万よ、七百七十万。体外受精する事七回。もうね、もし子供が出来たら名前をナナちゃんにしようかって思ってる」

リュウ「男だったらどうすんだ」

ヤヨイ「(叫ぶ)男でもなんでもいいから欲しいわよ！」

リュウ「!.....」

ヤヨイ「できないじゃない。タイミング法もやった。クラミジアも検査したし、ホルモン調整する薬も飲んだし、造影剤、子宮ん中ぶっ込んで写真も撮ったし、子宮のなか綺麗に洗ったし、あなたの精子をこの奥まで入れて人工授精も試したし、私の卵子を外に取り出してあなたの精子振りかけて体外受精も試したし、精子一個を何か細いガラス管で顕微鏡で直接卵子に入れてこの中に戻してみたし、ありとあらゆることをやった。でもね、できないじゃない。全然できないじゃない。だから」

リュウ「.....だから?」

ヤヨイ「二人目が出来たら、そっちは私たちの子にしてもいいって言ってくれてるの」

リュウ「(響生に)何を言ってくれてるんだ!」

ヤヨイ「AIDって考え方もあるじゃない」

リュウ「AIDってのは、第三者の男から精子を譲り受けて、体外受精して卵子を子宮に戻すことを言うんだ」

ヤヨイ「体外受精するのと、生で子宮内で受精するのどう違うのよ。むしろ、体外受精より子宮内受精の方が自然じゃない。あなたの好きな摂理じゃない!」

リュウ「そりや……そうかもしれないけど。その方法で行くと二人目もこいつらの子供になる。AIDは第三者の精子提供は認めていても、逆、つまり第三者の卵子提供は認められていない。つまり、俺は法律上、父親になれない」

響生「それは大丈夫だ。二人目は養子縁組して、お前の子供に必ずする。それも特別養子縁組で、俺らとの親子関係はちゃんと解消して、お前だけが親権を持てるようにする」

ヤヨイ「ほら」

リュウ「ほらじゃねえよ。そんなのなんの保証もないだろ。こいつらが途中で気が変わったらどうするんだ」

響生「変わらない!」

繭「変わりません!」

リュウ「要らねえよそんな口約束! あの子、百歩譲って、いや、一万歩譲って、俺の精子を提供してもいいよ。なんでセックスする必要があるわけ? この人と。他人の奥さんと」

ヤヨイ「セックスがなければいいわけ?」

リュウ「まあ、そうだよ」

ヤヨイ「なんで」

リュウ「だって……」

響生「多分あれだよな。気持ちいいもんなセックスって。それにさ、相手を気持ちよくさせたりしなきゃいけないしさ。多分それがなんていうか、後ろめたいんだよな、他人の妻とセックスするときにな」

リュウ「そうだよ。それだよ!」

響生「でも、正直にいうとさ、うちにAIDとかする経済的余

裕はないんだ。俺の治療で結構使っちゃってさ」

ヤヨイ「私が貸そうかって言ったんだけど」

響生「さすがにそれは違うなって思ってたさ」

繭「あの子。なんなのさっきから」

リュウ「？」

繭「なんかさ、基本的に議論の論点が間違ってるじゃない？」

響生「やっぱり!？」

繭「はい、その君。今回の場合、セックスというその行為の主体は誰ですか」

リュウ「主体？」

響生「こいつ哲学科なんだよ大学」

繭「行為の主体は？」

リュウ「この場合は、俺？ あ、繭さん？」

繭「そこ。その考え方が、あなたを後ろめたくしてるのね」  
リュウ「？」

繭「行為の目的は、セックスではありません。それはあきらかですよ。あ、そこから証明しますか？」

リュウ「それは結構」

繭「では目的はセックスそのものではありません。目的は、受精です。するとセックスは手段となります。セックスするのは人間なので、人間は手段でしかありません。となると、セックスそのものの主体は、卵子、あるいは精子ということになります。QED」

リュウ「はい？」

繭「だから。セックスの相手が私だと思っから、自分が行為の主体だと思うから、いやらしさとか、気恥ずかしさ、後ろめたさが産まれるんです。これから行わんとして、いる行為の主体は、精子あるいは卵子です。帰納法的

にもそうです。人工授精も体外受精もAIDも、主体はすべて精子と卵子。人間は除外されている。主体はあなたではなく、精子。わたしとまぐわると、あなたはあなたの精神という主体を失って、精子になるの。精神が、精子になるの」

リュウ「……」

響生「理解できたか？」

リュウ「論理的には」

ヤヨイ「おお。さすが」

響生「大きな一歩だ」

リュウ「つまり、君たちが欲しいのは、俺そのものじゃなくて、俺の、この陰囊の中に蓄えられた、精子たちである」

響生「そう！」

リュウ「セックスと快楽は別物である」

繭「そう！」

リュウ「これは快楽のためのセックスではなく、受精のためだけのセックスである」

ヤヨイ「そう！」

リュウ「それら二つのセックスには、明確な違いがある」

三人「そう！」

ヤヨイ「そしてあなたの生殖能力は健康そのもの」

繭「私の生殖能力も健康そのもの」

三人「♪たったたんーん！」

リュウ「一つ確認しておきたい。お前無精子症だったよな」

響生「おう」

リュウ「精子って、一匹でも入れば受精できるんだぞ？」

響生「知ってる」

リュウ「いないのか」

響生「……」

リュウ「抗精子抗体も顕微鏡もやったのか」

響生「やった。育毛剤もやめた」

リュウ「ああ、あれはよくないからな」

響生「そして俺は思った。あれはティーンネイジャーの頃。毎日何度も何度もオナった。そしてティッシュにぶちまけられた液体を見て、おお、俺の子供達が今日も三億匹死んでいくぜ、可哀想だぜ、もったいないぜ、さようなら！って思ってた。だが実は一匹もいなかった」

リュウ「見た目では分からないからな」

響生「そんなことよりも！ これまでのセックスだ！ いちいちコンドーム付けてたのは一体なんだったんだ。全部生でよかったじゃねえか！」

リュウ「ま、感染症予防の観点からいうと、正しいんだけどな」

響生「でも悲しいじゃねえか……」

リュウ、響生を慰めて。

ヤヨイ「取りあえず試してみましようよ」

リュウ「何を」

ヤヨイ「私が手でする？ それで射精の瞬間だけ彼女に入る？」

リュウ「やめ……」

ヤヨイ「それとも、最初から彼女とする？ リュウへい前から言ってたもんね、繭ちゃん結構かわいいって」

リュウ「いやそうだけだよ」

ヤヨイ「たまには若い子抱きたいでしょ。私はほんとに構わないの。むしろそうしてほしいの」

リュウ「ヤヨイ……」

ヤヨイ「どっちがいい？ 私と彼女」

響生「どつちがいいんだ？ ん？」

リュウ「……」

とゆっくり、繭を指さす。

響生「決定」

みな、さっとリュウへいと繭をベッドに、響生と

ヤヨイは壁の方へ退避。

繭「宜しくお願いします」

と三つ指。

響生「さあ。さあ暗転だ」

リュウ「さつきからその暗転って何だよ」

響生「さあ、抱けえ！ 抱くがよいい。そのうら若き生贄を！」

と祈ったり。

リュウ「うるさいよ。てか部屋にいるの？ 気が散るけど」

ヤヨイ「やる気になってくれる……（泣）」

響生「俺たちはー！ この革命的瞬間をー！ 見届けなければ

ならないー！ だがしかしー、いないもの思っ

れー！」

リュウ「無理だよ」

響生「雑談しよう。そういえばピザこないな。頼んだよね」

ヤヨイ「ああ、そうね。もう結構経つわよね」

響生「彼はまだ起ってないみたいだけどね」

ヤヨイ・響生「だーっはっはっは」

リュウ「うるさい。……今日じゃなきやダメなのか」

響生「尿中のLHだっけ？」

ヤヨイ「黄体形成ホルモン」

響生「あの数字が上がってきてる」

ヤヨイ「36時間以内！」

リュウ「排卵検査薬か。でもさ」

繭 「私、魅力ないですか」

リュウ 「そういうことじゃないよもちろん」

響 生 「明かり。明かり」

ヤヨイ 「おけ！」

と照明をいじる。響生、音楽をかけたたり。雰囲気  
が出来上がる。

繭 「どういのがお好きですか。言ってみて下さい。私何でも  
します。子供のためなら何でもするのが母親つてもんじ  
やないんですか！」

リュウ 「なんか違うよ？」

繭 「好きなセリフとかありますか。こう呼ばれたら興奮する、  
とか」

リュウ 「あ、じゃあ、先生で」

繭 「はい、せんせ」

リュウ 「おお……」

繭 「せんせ」

リュウ 「……」

繭 「せんせ。あれ？ あとは何かありますか。何かしてほし  
いこと」

リュウ 「あのね。男ってお膳立てされると羨えるのね。だから、  
段取りっぱくくない方が僕は嬉しいんだけど……」

繭 「(D.S) てめえ医者だからって昼間はちやほやされてん  
だろ。夜はな、私が可愛がってやるからよ。ほら、舐  
めな」

と馬乗りに。(響生が勝手に興奮している)

リュウ 「いや、あ、そういうのは……」

繭 「逆がいいですか？」

リュウ 「逆？」

繭 「やめて……こないで……先生、助けて、およしになって  
下さい」

とリュウヘイの手を胸に持っていていき

繭 「あああん！」

と仰け反る。リュウヘイ、パツと手を放す。

繭 「……あれ？（とヤヨイを見る）」

ヤヨイ「あなたレイプものの動画とかよく見てるじゃない」

リュウ「見てねえよ。全然見てねえ」

響 生「ああもうなんなんだよ。何にだったら興奮するんだよお

前は。俺はもうイキそうだ」

ヤヨイ「ノーマルな人間ほどめんどくさいわよねえ。あ、これ

は？ あとこれも」

とバッグからローターやバイブを出してくる。

リュウ「なんでそんなもん持ってんだよ」

ヤヨイ「マンネリしたらオモチャって相場は決まってるの。ね

え？」

響 生「ああ、俺もよく使うよ？」

リュウ「うそだ。うそだろ？」

ヤヨイ「はい」

と握らせる。

繭 「どうぞー」

とM字。

リュウ「!？」

響 生「ダメだよ、お膳立てしちゃダメ」

繭 「そ、そんなの初めてです。そんなの使ったら私、どうに

かなっちゃう」

響 生「そうそうそう」

リュウヘイ、じっとオモチャを見つめている。そ

れに気付いたヤヨイ、響生を引き留める。

ヤヨイ「――」

響生「？」

リュウヘイ、オモチャと繭を見比べて……。オモ  
チャを放り出して、一気に覆い被さる。

リュウヘイ、繭とキスをして、

服を脱がせて、

股間に手を這わせ……

繭 「はあ、はあ、はあ……せんせ。せんせー」

リュウヘイ、ズボンを脱いで……。

暗転していく。

べちゃべちゃと舐める音が響き渡る。

リュウの声「繭ちゃん。繭ちゃん。すごい。すいづく」

繭の声「んあ！ もう我慢できない。来て。来て……。来て……」

リュウの声「繭ちゃん。繭ちゃん。いくよ、繭ちゃん。いくよ…

…繭ちゃ！？」

明かり入る。

ヤヨイ「いやあああ！！」

リュウヘイが、響生とヤヨイに羽交い絞めにされ、

引き剥がされている。

響生「服を着ろ。服を着ろ！」

リュウ「やらせろ！ やらせろおお！」

繭、慌ててはだけていた服を閉めたり。

ヤヨイ「無理。私やっぱり無理、あなたが他の女抱くとかあり得

なく」

リュウ「何でだよ。俺が抱いてるんじゃない。抱くのは俺の精子

だ。精子が、あの、卵子を抱くだけだ」

ヤヨイ「ダメ！」

と抱き寄せる。

リュウ「放せえ！」

ヤヨイ「行かないで……（泣）」

と抱きすがっている。

響生「大丈夫か。アイツに何か変なことされなかったか。怪我

はないか」

リュウ「何言ってるんだ！ 快樂と子作りは別なんじゃねえのかよ」

ヤヨイ「子供はもういいから。もういいから」

響生「嘘だよな、気持ちよっそうにしたのは嘘だよな？」

と体をさすっている。繭、呆然と放心している。

リュウ「なんだよそれ……」

響生「繭……。繭……。ごめんね。ごめんね、こんなことさせて」

繭「……おしまいね、これで」

響生「？」

繭「すべておしまい。これから私たち、一生涯、子供を作らないセックスをするのよ。子供を作らないセックスってなに？ 愛の確認？ 愛の確認のためにセックスをするの？ セックスは愛の結果でしょう？ 逆よ。本末転倒。学校で習うのは避妊の方法だけ。避妊しないと赤ちゃんできるぞって脅された。だから私は、赤ちゃんは放っておいてもできるって思ってた。セックスすれば、勝手にできるものだと思ってた。でもそうじゃなかった。どうして誰も……妊娠する方法を教えてくださいなかつたの？ どうして？ ねえ」

響生「……」

繭「あなたを責めてるんじゃないのよ？ ただ、漠然とした感想を述べただけ」

響生、繭を抱きしめる。

リュウヘイ、そっと優しくヤヨイをほどぎ、離れる。

ヤヨイ「？」

そしてベッドへ行き、響生をそっと引き剥がす。

響生「？」

リュウヘイ、繭の上に覆い被さる。

繭「？」

リュウ「……絶対、二人作るからな」

暗転。

(おわり)